

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係	
旧約聖書原典講読Ⅱ a	左近 豊
前期・2単位	<登録条件>ヒブル語基礎文法修得者
<p><授業の到達目標及びテーマ> 旧約聖書ヒブル語本文を読む。テキストの文献学的諸問題、そして文芸学的特長を把握することを目的とする。</p>	
<p><授業の概要> エレミヤ書と哀歌を取り上げる。それぞれに旧約の民の歩みの重要な局面で語られた言葉であり、旧約聖書の間人観、世界観、そして歴史観を反映している。写本、古代訳を参照しつつヒブル語本文を読む。</p>	
<p><履修条件></p>	
<p><授業計画></p> <p>第1回：エレミヤ書 序 1:1-3 第2回：エレミヤ書 1:4-8 第3回：エレミヤ書 1:9-10 第4回：エレミヤ書 1:11-13 第5回：エレミヤ書 1:14-16 第6回：エレミヤ書 1:17-19 第7回：エレミヤ書 2:1-3 第8回：エレミヤ書 2:4-6 第9回：エレミヤ書 2:7-9 第10回：エレミヤ書 2:10-13 第11回：エレミヤ書 2:14-16 第12回：哀歌 1:3~5 第13回：哀歌 1:6~7 第14回：哀歌 1:8~11 第15回：総括：</p>	
<p><準備学習等の指示> 各授業で課題となる聖書箇所事前に目を通しておくこと。</p>	
<p><テキスト> <i>Biblia Hebraica Stuttgartensia (BHS)</i></p>	
<p><参考書> 辞書:F.Brown, S.R.Driver, and C.A.Briggs eds., <i>Hebrew and English Lexicon of the Old Testament</i>. (BDB)、 L. Koehler and W.Baumgartner, <i>The Hebrew and Aramaic Lexicon of the Old Testament (HALOT)</i>、 文法書:<i>Gesenius' Hebrew Grammar</i>、B.Waltke and M.O'Connor, <i>An Introduction to Biblical Hebrew Syntax</i>、 H.Bauer and P.Leander, <i>Historische Grammatik der hebraeischen Sprache</i>。 参考書:ヴェルトヴァイン著『旧約聖書の本文研究』、E.Tov, <i>Textual Criticism of the Hebrew Bible</i>、『左近淑 著作集 III』、Field, <i>Origenis Hexapla</i> コンコルダンス:Lisowsky, <i>Konkordanz zum Hebraeischen Alten Testament</i>、S.Mandelkern, <i>Veteris Testamenti concordantiae hebraicae atque chaldaicae</i>、E.Hatch and H.A.Redpath, <i>A Concordance to the Septuagint and the other Greek Versions of the Old Testament (LXX)</i> など</p>	
<p><学生に対する評価(方法・基準)> 授業への参加度と期末レポートの総合で評価する。</p>	

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係	
旧約聖書原典釈義Ⅱ a	本間 敏雄
前期・2単位	<登録条件>
<p><授業の到達目標及びテーマ> 創世記25, 27, 28章のヤコブ・エサウ物語をヒブル語本文(マソラ本文)において釈義する。</p>	
<p><授業の概要> 創世記25章(19節~)以下のヤコブ・エサウ物語を構文及び本文批判、伝承史等釈義的諸方法を検討しつつ釈義する。ヒブル語本文の諸現象に留意し、テキスト理解を深めたい。印刷聖書(BHS)及び写本(L:レニングラード写本)とマソラの基礎知識も学ぶ。後期課程「旧約聖書原典特殊研究a」と合同。</p>	
<p><履修条件> ヒブル語基礎文法修得者</p>	
<p><授業計画></p> <p>第1回:創世記25:19-23 リベカの妊娠と託宣 第2回:創世記25:24-28 エサウとヤコブの誕生 第3回:創世記25:29-34 長子の権利 第4回:創世記27:1-7 父の祝福計画 第5回:創世記27:8-13 母の計略 第6回:創世記27:14-20 計略の実行 第7回:創世記27:21-26 〃 第8回:創世記27:27-29 奪われた祝福 第9回:創世記27:30-36 エサウの嘆き 第10回:創世記27:37-40 エサウの運命 第11回:創世記27:41-46 母の恐れ 第12回:創世記28:1-9 ヤコブの逃亡 第13回:創世記28:10-15 天からの階段 第14回:創世記28:16-19 ベテル命名(1) 第15回:創世記28:20-22 ヤコブの誓願</p>	
<p><準備学習等の指示></p>	
<p><テキスト> Biblia Hebraica Stuttgartensia(BHS)、レニングラード写本(Codex Leningradensis)写真版。辞書:Holladay、専門的なものはGesenius、BDB 或いはHALOT (HALAT)。「ヒブル語入門」(改訂増補版 左近/本間)(10.文の構造(構文論)、12補説:本文の諸現象(補注一覧))。</p>	
<p><参考書> 「旧約聖書の本文研究」(E.ヴェルトヴァイン 鍋谷/本間共訳)、「旧約聖書釈義入門」(H.バルト/O.H.シュテック 山我哲雄訳)。「ヘブライ語聖書への手引き」(R.ウォンネベルガー 松田伊作訳)、A simplified guide to BHS(H.P.Rueger)。諸文献は順次提示する。</p>	
<p><学生に対する評価(方法・基準)> 課題の発表と討議、レポートの総合で評価する。</p>	

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係	
旧約聖書原典釈義Ⅱ b	本間 敏雄
後期・2単位	<登録条件>
<p><授業の到達目標及びテーマ> 創世記32, 35, 37章を、ヒブル語本文（マソラ本文）において釈義する。</p>	
<p><授業の概要> 32, 35章のヤコブ・エサウ物語と37章ヨセフ物語を構文及び本文批判、伝承史等釈義的諸方法を検討しつつ釈義する。写本とマソラ、ヒブル語本文の諸現象に留意し、テキスト理解を深めたい。後期課程「旧約聖書原典特殊研究 a」と合同。後期課程「旧約聖書原典特殊研究 b」と合同。</p>	
<p><履修条件> ヒブル語基礎文法修得者</p>	
<p><授業計画></p> <p>第1回：創世記32：1－7 帰郷の旅 第2回：創世記32：8－13 恐れと祈り 第3回：創世記32：14－22 再会の準備 第4回：創世記32：23－29 ヤボクの渡し、ヤコブの改名（1） 第5回：創世記32：30－33 ペヌエル 第6回：創世記35：1－8 一家のきよめ、エル・ベテル 第7回：創世記35：9－15 ヤコブの改名（2）、ベテル命名（2） 第8回：創世記35：16－22 a ラケルの死 第9回：創世記35：22 b－29 イサクの死 第10回：創世記37：1－8 ヨセフの夢 第11回：創世記37：9－11 〃 第12回：創世記37：12－17 シケムのヨセフ 第13回：創世記37：18－24 兄弟たちの計略 第14回：創世記37：25－30 売られたヨセフ 第15回：創世記37：31－36 父の悲嘆</p>	
<p><準備学習等の指示></p>	
<p><テキスト> Biblia Hebraica Stuttgartensia(BHS)、レニングラード写本(Codex Leningradensis) 写真版。辞書：Holladay、専門的なものは Gesenius、BDB 或いは HALOT (HALAT)。「ヒブル語入門」(改訂増補版 左近／本間)(10. 文の構造(構文論)、12 補説：本文の諸現象(補注一覧))。</p>	
<p><参考書> 「旧約聖書の本文研究」(E.ヴェルトヴァイン 鍋谷／本間共訳)、「旧約聖書釈義入門」(H.バルト／O.H.シュテック 山我哲雄訳)。「ヘブライ語聖書への手引き」(R.ウォンネベルガー 松田伊作訳)、A simplified guide to BHS(H.P.Rueger). 諸文献は順次提示する。</p>	
<p><学生に対する評価(方法・基準)> 課題の発表と討議、レポートの総合で評価する。</p>	

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係	
旧約聖書神学特講 I b	小友 聡
後期・2単位	<登録条件>
<p><授業の到達目標及びテーマ> 旧約神学、釈義、歴史に関する諸問題から、一つの主題を掲げて深く掘り下げる特殊研究のクラスである。</p>	
<p><授業の概要> 雅歌に関する様々な文献を読み、今日、雅歌をどのように理解すべきかを多角的に考える。演習形式で行う。</p>	
<p><履修条件> ヘブライ語を履修していない旧約専攻外の学生に開かれた授業である。</p>	
<p><授業計画></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション 2. 勝村弘也「雅歌」『岩波版旧約聖書』 3. 水野隆一「雅歌」『新共同訳・旧約聖書略解』 4. ロバート・W. ジェンソン（水野訳）『雅歌』（現代聖書注解） 5. オリゲネス（小高訳）『雅歌注解・講話』、創文社 6. ゴルヴィッツァー（佐々木訳）『愛の賛歌』 7. P. トリプル『神と人間性の修辞学』、ヨルダン社（pp. 209-240） 8. 佐々木勝彦『愛は死のように強く—雅歌の宇宙』 9. 並木浩一「旧約聖書におけるパストラル」、『パストラル—牧歌の源流と展開』 10. 永井晋「雅歌の形而上学—生命の現象学」『現代思想（レヴィナス）』 11. ダニエル・グロスバーク「雅歌における自然・人間・愛」、『雅歌』（インタープリテーション 79号） 12. トッド・リナファルト「愛の数式」、前掲書 13. ドブス・オルソップ「美の喜びと雅歌4章1-7節」、前掲書 14. シュナーブル・シュワイツァー「雅歌—牧会ケアのための隠喩」、前掲書 15. 並木浩一先生の特別講義 	
<p><準備学習等の指示> 毎回発表していただき、それに基づいて全員で討議する。</p>	
<p><テキスト> 上記のテキストを扱う。入手困難なものはコピーを使う。</p>	
<p><参考書> その都度、提示する。</p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）> 発表と授業への積極性、また学期末の提出レポート（4000字）によって評価する。</p>	

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係	
旧約聖書学特研Ⅱ a	魯 恩碩
前期・2単位	<登録条件>
<p><授業の到達目標及びテーマ> 聖書形成の歴史と聖書解釈の歴史に対する理解を深めるための特殊研究のクラスである。</p>	
<p><授業の概要> この学期は、講師の拙著である『From Judah to Judaea: Socio-Economic Structures and Processes in the Persian Period』を読みながら旧約聖書形成史に関する最近の研究動向を把握した後、アレクサンドリア学派のアレゴリカルな解釈、アンティオキア学派のディボロジカルな解釈、アウグスティヌスやトマス・アキナスなどによる四重の解釈、近代以降の歴史批評学的解釈などの様々な聖書解釈の方法を検討する。</p>	
<p><履修条件></p>	
<p><授業計画></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション 2. 緒論的問題 3. Qumran 共同体の敬虔性 4. 旧約聖書における審判思想の歴史的発展過程 5. 紀元前7世紀から6世紀までのユダヤ共同体における社会経済的変化の過程 6. 紀元前4世紀のYehudの政治状況と五書の正典化の関係 7. 「契約の書」の時代背景 8. Origenの聖書解釈 9. Diodoreの聖書解釈 10. Augustineの聖書解釈 11. LutherとCalvinの聖書解釈 12. Spinozaの聖書解釈 13. Wellhausenの聖書解釈 14. 現代聖書学の聖書解釈 15. 総括 	
<p><準備学習等の指示></p>	
<p><テキスト> Johannes Unsok Ro 『From Judah to Judaea: Socio-Economic Structures and Processes in the Persian Period』 (Sheffield Phoenix Press, 2013), 学生各自で購入する。</p>	
<p><参考書> 授業の中で教員が指示する。</p>	
<p><学生に対する評価(方法・基準)> ディスカッションなどによる授業への貢献が3割、プレゼンテーションが3割、期末レポート(4000字)が4割。期末レポートは、最終授業日に提出すること。レポートの採点基準は、論理性、独創性、正確性を重視する。</p>	

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係	
旧約聖書学演習Ⅱ a	大住 雄一
前期・2単位	<登録条件>原則として ab 通年で登録すること
<p><授業の到達目標及びテーマ> 旧約聖書の諸主題、あるいは旧約聖書を読む場合の諸課題を共に学ぶ。ヒブル語を履修していない人、聖書神学（旧約聖書神学）専攻でない人にも開かれた演習である。</p>	
<p><授業の概要> 今回は、「十戒における時間」と題して、旧約聖書の内容、ものの考え方、言語の特質をさぐる。ヒブル語や七十人訳のギリシア語の知識を前提とはしないが、説明をある程度理解する意志と準備学習は求められる。前期は、十戒にある時間的発想を究明する。</p>	
<p><履修条件></p>	
<p><授業計画> 「十戒における時間」</p> <p>I. アブラハム・ヘシェル『シャバット』</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 導入 現代文明と時間の喪失 2. 偶像崇拜の本質 3. 聖書の発想 <p>II. 聖書の中の安息日</p> <ol style="list-style-type: none"> 4. 聖書の中の二つの安息日 5. 聖書の外の安息日 6. 教会の安息日 <p>III. 安息日</p> <ol style="list-style-type: none"> 7. 安息日とは何か 8. 「人の子は安息日の主でもある」 9. 安息日論争の本質 <p>IV. 安息日とイスラエル</p> <ol style="list-style-type: none"> 10. 労働からの解放 11. 安息を楽しむ土地 12. 終末論 <p>V. 安息日と創造</p> <ol style="list-style-type: none"> 13. 時間的秩序体 14. 安息日を聖とする 15. まとめ 	
<p><準備学習等の指示></p>	
<p><テキスト></p>	
<p><参考書> 毎回必要な参考文献を示すが、A・J・ヘシェル（森泉弘次訳）『シャバット』教文館を議論の出発点としたい。</p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）> 授業で割り当てられた課題の発表を含む授業参加度によって評価する。</p>	

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係	
旧約聖書学演習Ⅱb	大住 雄一
後期・2単位	<登録条件>原則としてab通年で登録すること
<p><授業の到達目標及びテーマ> 旧約聖書の諸主題、あるいは旧約聖書を読む場合の諸課題を共に学ぶ。ヒブル語を履修していない人、聖書神学（旧約聖書神学）専攻でない人にも開かれた演習である。</p>	
<p><授業の概要> 今回は、「十戒における時間」と題して、旧約聖書の内容、ものの考え方、言語の特質をさぐる。ヒブル語や七十人訳のギリシア語の知識を前提とはしないが、説明をある程度理解する意志と準備学習は求められる。特に後期は問題の聖書全体への広がり进行を考察する。</p>	
<p><履修条件></p>	
<p><授業計画> 「十戒における時間」</p> <p>I. 旧約における時間</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ヒブル語の時間概念 2. 時間と空間 3. 神の支配 <p>II. 父と母とを敬え</p> <ol style="list-style-type: none"> 4. 時間軸の共同体 5. 生命の共同性 6. 老人を敬え <p>III. 安息日規定と父母を敬え</p> <ol style="list-style-type: none"> 7. 十戒の真中 8. 肯定的命令の意味 9. 像の禁止との関係 <p>IV. 安息日を守るのがイスラエル</p> <ol style="list-style-type: none"> 10. シナイで告げられた安息日 11. 安息日を汚した民 12. 契約の印としての安息日 <p>V. 瞬間と永遠</p> <ol style="list-style-type: none"> 13. 存在を規定するもの 14. 唯一の神 15. まとめ 	
<p><準備学習等の指示></p>	
<p><テキスト></p>	
<p><参考書> 毎回必要な参考文献を示す。</p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）> 授業で割り当てられた課題の発表を含む授業参加度によって評価する。</p>	

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係	
シリア語 a	佐藤 泉
前期・2単位	<登録条件> 通年で履修するのが望ましい。
<p><授業の到達目標及びテーマ> 聖書の古代訳の一つであるペシッタ（シリア語訳）を読むことは、聖書の原典との比較によって、聖書解釈に大きな意味を持って来る。この授業ではペシッタを読むことを目標としている。</p>	
<p><授業の概要> ペシッタを読むために必要なシリア語の文法を学ぶ。</p>	
<p><履修条件> ヒブル語履修済みであることが望ましい。</p>	
<p><授業計画> 第1回：序 シリア語を学ぶ意義等話し、子音について（1）ヤコブ派の書体を学ぶ。 第2回：子音について（2） ネストリウス派とエストラングラの書体を学ぶ。 第3回：母音について ヤコブ派とネストリウス派の母音記号を学ぶ。 第4回：代名詞について 人称・指示・疑問・関係代名詞を学ぶ。 第5回：前置詞について 基本的なものをいくつか学ぶ。 第6回：名詞について（1） 基本的な名詞について、ヘブライ語との比較をしつつ、その特徴を学ぶ。 第7回：代名詞語尾について ヘブライ語と同様にシリア語も名詞等に代名詞語尾がつくことを学ぶ。 第8回：名詞について（2） 母音の移動を伴うものを学ぶ。 第9回：名詞について（3） 不規則変化するものを学ぶ。 第10回：規則動詞について（1） Peal 形の変化、特に完了を学ぶ。 第11回：規則動詞について（2） Peal 形の変化、特に未完了・命令・分詞・不定詞を学ぶ。 第12回：規則動詞について（3） Ethpeel 形の変化を学ぶ。 第13回：規則動詞について（4） Pael 形と Ethpael 形の変化を学ぶ。 第14回：規則動詞について（5） Aphel 形と Ettaphal 形の変化を学ぶ。 第15回：規則動詞について（6） 代名詞語尾のついた形の変化を学ぶ。</p>	
<p><準備学習等の指示> 授業中に指示のあった練習問題等について、できる範囲で準備すること。</p>	
<p><テキスト> Theodore H. Robinson, Paradigms and Exercises in Syriac Grammar, 3rd. ed., Oxford University Press, London, 1949.</p>	
<p><参考書> William Jennings, Lexicon to the Syriac New Testament, Oxford at the Clarendon Press, 1926.</p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）> 予習・復習、積極的な授業参加の状況によって成績をつける。</p>	

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係	
シリア語 b	佐藤 泉
後期・2単位	<登録条件> 通年で履修するのが望ましい。
<p><授業の到達目標及びテーマ> 聖書の古代訳の一つであるペシッタ（シリア語訳）を読むことは、聖書の原典との比較によって、聖書解釈に大きな意味を持って来る。この授業ではペシッタを読むことを目標としている。</p>	
<p><授業の概要> シリア語の文法の学びを継続する。その後に講読に入るが、まず新約からマタイによる福音書の「山上の説教」、さらに旧約からエレミヤ書等をペシッタで読む。（箇所は未定。授業中に指示する。）</p>	
<p><履修条件> ヒブル語履修済みであること並びにシリア語 a 履修済みであることが望ましい。</p>	
<p><授業計画></p> <p>第1回：不規則動詞について（1） Pê Nun 動詞の変化を学ぶ。 第2回：不規則動詞について（2） Lamed 喉音動詞の変化を学ぶ。 第3回：不規則動詞について（3） Pê 'alep 動詞の変化を学ぶ。 第4回：不規則動詞について（4） Pê Yôd 動詞の変化を学ぶ。 第5回：不規則動詞について（5） 二根字動詞の変化を学ぶ。 第6回：不規則動詞について（6） 二重'ayin 動詞の変化を学ぶ。 第7回：不規則動詞について（7） Lamed Hê・Lamed Yôd 動詞の変化を学ぶ。 第8回：「山上の説教」の講読（1） Jennings の辞書を引きながら、ペシッタを読むことに慣れる。 第9回：「山上の説教」の講読（2） 原典との比較をしつつ読むことを味わう。 第10回：「山上の説教」の講読（3） シリア語文法、特に不規則変化する名詞を確認しつつ読む。 第11回：「山上の説教」の講読（4） シリア語文法、特に動詞の変化を確認しつつ読む。 第12回：「山上の説教」の講読（5） シリア語が解釈に影響を与えている一例について話す。 第13回：エレミヤ等の講読（1） ネストリウス派の書体・母音記号で読むことに慣れる。 第14回：エレミヤ等の講読（2） シリア語文法を全体的に思い出しつつ読む。 第15回：エレミヤ等の講読（3） 原典や七十人訳と比較しつつ読むことを味わう。</p>	
<p><準備学習等の指示> 授業中に指示のあった練習問題等について、できる範囲で準備すること。</p>	
<p><テキスト> Theodore H. Robinson, Paradigms and Exercises in Syriac Grammar, 3rd. ed., Oxford University Press, London, 1949.</p>	
<p><参考書> William Jennings, Lexicon to the Syriac New Testament, Oxford at the Clarendon Press, 1926.</p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）> 予習・復習、積極的な授業参加の状況によって成績をつける。</p>	

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係	
修士論文指導演習 旧約神学 I	大住 雄一 小友 聡
後期・2単位	<登録条件>
<p><授業の到達目標及びテーマ> 翌年度前期末に修士論文を提出しようとする前期課程1年次生の論文執筆の指導と情報交換を行う。</p>	
<p><授業の概要> 論文を執筆することの意味とプロセスを解説し、テキスト研究ならびに二次文献の検索を行う。 毎回の授業は2名の教員が共に責任を負うが、主にそれぞれ以下の分野を担当する。 大住雄一：律法、預言者関係 小友聡：黙示文学、知恵文学関係</p>	
<p><履修条件> 2015年9月に旧約に関する修士論文提出予定者は参加すること</p>	
<p><授業計画></p> <p>第1回：導入 論文執筆の意味 第2回：課題の見だし方 律法関係 第3回：課題の見だし方 預言者関係 第4回：課題の見だし方 文学関係 第5回：テキスト翻訳 律法関係 第6回：テキスト翻訳 預言者関係 第7回：テキスト翻訳 文学関係 第8回：テキストの構造解明 律法関係 第9回：テキストの構造解明 預言者関係 第10回：テキストの構造解明 文学関係 第11回：辞書、コンコルダンスの使い方 第12回：二次文献の検索方法 第13回：暫定的な文献表の作成 第14回：二次文献の使い方 第15回：質疑応答</p>	
<p><準備学習等の指示></p>	
<p><テキスト> ビブリア・ヘブライカほか、論文執筆者別に指示する。</p>	
<p><参考書> 毎回必要な文献を指示する。</p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）> 割り当てられた課題の発表（50%）、討論への貢献（50%）を総合して評価する。</p>	

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係	
修士論文指導演習 旧約神学Ⅱ	大住 雄一
前期・2単位	<登録条件>
<p><授業の到達目標及びテーマ> 今年度前期末に修士論文を提出しようとする前期課程二年次生の論文執筆の指導と情報交換を行う。</p>	
<p><授業の概要> 論文の準備研究を各自が発表し、参加者がこれについて質問し、意見を述べる。</p>	
<p><履修条件> 本年9月に旧約に関する修士論文提出予定者は参加すること</p>	
<p><授業計画></p> <p>第1回：導入 論文執筆の手順 第2回：問題設定 律法関係 第3回：問題設定 預言者関係 第4回：問題設定 文学関係 第5回：研究史 律法関係 第6回：研究史 預言者関係 第7回：研究史 文学関係 第8回：主要テーゼ 律法関係 第9回：主要テーゼ 預言者関係 第10回：主要テーゼ 文学関係 第11回：論証過程 律法関係 第12回：論証過程 預言者関係 第13回：論証過程 文学関係 第14回：結論 第15回：最終的な質疑応答</p>	
<p><準備学習等の指示></p>	
<p><テキスト> 論文執筆者別に指示する。</p>	
<p><参考書> 毎回必要な文献を指示する。</p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）> 学期末には暫定的に可否のみ通知するが、最終的に提出論文の成績が本演習の成績となる。</p>	

聖書神学専攻・新約聖書神学関係	
新約聖書学特講Ⅱ a	中野 実
前期・2単位	<登録条件>特になし
<p><授業の到達目標及びテーマ> 新約聖書学、新約聖書神学における重要研究課題について学び、その理解を深めることがクラスの目標。今回は、テーマとしてヘブライ人への手紙を取り上げる。</p>	
<p><授業の概要> ヘブライ書の原典から日本語に翻訳するという課題について共に学んでみる。</p>	
<p><履修条件>通年で履修するのが原則。そうでない場合は、事前に担当者と相談すること。</p>	
<p><授業計画> 毎回、担当教員（中野）が用意したヘブライ書の日本語訳を吟味、検討するのがクラスの中身。毎回担当学生を決め、ギリシャ語原典およびいくつかの日本語訳を吟味しながら、翻訳を検討する役割を果たしてもらう。その際、より具体的には、本文批評上の問題、単元の区切りの問題、文法上の問題、内容的、神学的問題、日本語の問題などを検討する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 オリエンテーション 2 ヘブライ書の緒論 著者問題 3 緒論 成立年代、成立地、宛先など 4 緒論 構成など 5 1 : 1-4 6 1 : 5-14 7 2 : 1-4 8 2 : 5-18 9 3 : 1-6 10 3 : 7-4 : 13 (a) 3 : 7-19 11 3 : 7-4 : 13 (b) 4 : 1-13 12 4 : 14-16 13 5 : 1-10 14 5 : 11-6 : 20 (a) 6 : 4-12 15 5 : 11-6 : 20 (b) 6 : 13-20 	
<p><準備学習等の指示> クラスにおいて指示する。</p>	
<p><テキスト> 旧、新約聖書（いくつかの翻訳）、ギリシャ語の新約聖書など。</p>	
<p><参考書> 必要に応じて、担当者がクラスで指示する。</p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）>クラスへの積極的参加（出席、発表、質問、コメントなど）を求める。出席、分担発表、参加度（40%）、および（4000～5000字の）期末レポート（60%）によって総合的に評価する。出席が三分の二に達しない場合は、原則として評価の対象にしない。</p>	

聖書神学専攻・新約聖書神学関係	
新約聖書学特講Ⅱ b	中野 実
後期・2単位	<登録条件>特になし
<授業の到達目標及びテーマ>前期の欄を参照	
<授業の概要>前期と同じ	
<履修条件>前期と同じ	
<p><授業計画>前期の項目を参照。</p> <p>1 7:1-28 (a) 7:1-10 2 7:1-28 (b) 7:20-28 3 8:1-13 (a) 8:1-6 4 8:1-13 (b) 8:7-13 5 9:1-28 (a) 9:1-10 6 9:1-28 (b) 9:23-28 7 10:1-18 8 10:19-39 9 11:1-40 (a) 11:1-7 10 11:1-40 (b) 11:32-40 11 12:1-29 (a) 12:1-13 12 12:1-29 (b) 12:25-29 13 13:1-21 (a) 13:1-6 14 13:1-21 (b) 13:7-19 15 13:22-25</p>	
<準備学習等の指示>必要に応じてクラスで指示する	
<テキスト>前期の項目を参照	
<参考書>必要に応じて担当者がクラスで指示する。	
<学生に対する評価(方法・基準)>出席、分担発表、参加度(40%)と(4000~5000字の)期末レポート(60%)によって総合的に評価する。ただし、出席が3分の2に達しない場合、原則として評価の対象にしない。	

聖書神学専攻・新約聖書神学関係	
新約聖書学特研Ⅱ a	焼山 満里子
前期・2単位	<登録条件>
<p><授業の到達目標及びテーマ> 使徒パウロの伝道活動とパウロ教会について学ぶ。</p>	
<p><授業の概要> テキストを講読、批判検討しながら、パウロ書簡、初期キリスト教の形成について学ぶ。</p>	
<p><履修条件></p>	
<p><授業計画></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション 2. ミークス序論 3. ミークス第一章 「パウロ的キリスト教の都市環境」 33-64頁 4. ミークス第一章 「パウロ的キリスト教の都市環境」 65-112頁 5. ミークス第二章 「パウロ教会の会員達の社会層」 144-168頁 6. ミークス第二章 「パウロ教会の会員達の社会層」 169-190頁 7. ミークス第三章 「教会の形成」 205-246頁 8. ミークス第三章 「教会の形成」 247-280頁 9. ミークスの方法論の検討 10. ミークス第四章 「統治」 301-334頁 11. ミークス第四章 「統治」 335-360頁 12. ミークス第五章 「祭儀」 370-413頁 13. ミークス第六章 「信仰形態と生活形態」 423-450頁 14. ミークス第六章 「信仰形態と生活形態」 451-471頁 15. 総括 受講者の関心により予定は適宜調整する。 	
<p><準備学習等の指示> 各自、テキストを分担し講読を行う。各回発表担当者は議論の紹介をし、受講者と共に批判検討を行う。</p>	
<p><テキスト> ウェイン・ミークス『古代都市のキリスト教』加山久夫監訳 ヨルダン社、1989年。現在、絶版なので古本等の入手、図書館所蔵のものを使うことを勧める。</p>	
<p><参考書> 適宜紹介する。</p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）> 発表、議論への貢献等による授業参加、期末課題。</p>	

聖書神学専攻・新約聖書神学関係	
新約聖書学特研Ⅱ b	焼山 満里子
後期・2単位	<登録条件>
<p><授業の到達目標及びテーマ> テサロニケの信徒への手紙一、二積義を通して初期キリスト教の形成、パウロ伝道について学ぶ。</p>	
<p><授業の概要> テサロニケの信徒への手紙一、二の積義。</p>	
<p><履修条件></p>	
<p><授業計画></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. テサロニケの信徒への手紙一、概説 2. テサロニケの信徒への手紙一、1章 3. テサロニケの信徒への手紙一、2章 4. テサロニケの信徒への手紙一、3章 5. テサロニケの信徒への手紙一、4章 6. テサロニケの信徒への手紙一、5章 7. テサロニケの信徒への手紙一、総括 8. テサロニケの信徒への手紙二、概説 9. テサロニケの信徒への手紙二、1章 10. テサロニケの信徒への手紙二、2章 11. テサロニケの信徒への手紙二、3章 12. テサロニケの信徒への手紙二、総括 13. テサロニケの信徒への手紙一、二 終末論 14. テサロニケの信徒への手紙一、二 レトリック 15. 総括 	
<p><準備学習等の指示> 担当する箇所を G.フィー『新約聖書の積義』に従って積義し、発表、検討し合う。</p>	
<p><テキスト>適宜紹介する。</p>	
<p><参考書>適宜紹介する。</p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）> 発表、議論への貢献等による授業参加、期末課題。</p>	

聖書神学専攻・新約聖書神学関係	
新約聖書原典釈義 I a	小河 陽
前期・2単位	<登録条件>学期ごとに履修できるが、通年で受講することが望ましい。
<p><授業の到達目標及びテーマ> マルコ福音書の釈義を通して、ギリシア語原典釈義の方法を学ぶ。個々のテキストに関して、釈義上の問題を学び、神学内容を吟味するように訓練する。釈義から説教への展開の可能性も模索する。</p>	
<p><授業の概要> 始めに、マルコ福音書の研究史を概観して釈義上の諸問題を説明する。その後、範例として幾つかのテキストを選び釈義の方法の基本を具体的に学ぶ。以後はマルコ福音書から原則として毎回1つの段落を取り上げて、釈義の実際に取り組む。参加者各々は分担箇所について発表の義務がある。</p>	
<p><履修条件> ギリシア語の基礎知識を必要とするが、絶対条件とはしない。</p>	
<p><授業計画></p> <p>第1回： マルコ福音書の研究史を概観して、現代の研究状況と釈義の諸問題を学ぶ。</p> <p>第2回： マルコ 1:21-28（汚れた霊に憑かれた男）を例に、釈義の方法について学ぶ。</p> <p>第3回： マルコ 2:13-17（レビの召命）で、範例的にテキストの分析方法について学ぶ。</p> <p>第4回： マルコ 4:35-41（湖上の嵐を鎮める）で、範例的にテキスト分析の方法について学ぶ。</p> <p>第5回： マタイ 8:5-13 とルカ 7:1-10 の比較から、共観福音書の相違を学ぶ。</p> <p>第6回： マルコ 1:1-8（洗礼者ヨハネ）を中心に釈義を行う。</p> <p>第7回： マルコ 1:16-20（弟子召命）を中心に釈義を行う。</p> <p>第8回： マルコ 1:40-45（らい患者の癒し）を中心に釈義を行う。</p> <p>第9回： マルコ 2:23-28（安息日論争）中心に釈義を行う。</p> <p>第10回： マルコ 3:20-35（ベルゼブル論争とイエスの家族）を中心に釈義を行う。</p> <p>第11回： マルコ 4:1-20（種まきの譬え）を中心に釈義を行う。</p> <p>第12回： マルコ 5:21-43（ヤイロの娘とイエスの服に触れる女）を中心に釈義を行う。</p> <p>第13回： マルコ 6:6b-13（弟子の宣教派遣）を中心に釈義を行う。</p> <p>第14回： マルコ 6:30-44（5000人の供食）を中心に釈義を行う。</p> <p>第15回： マルコ 7:1-23（昔の人の言い伝え）を中心に釈義を行う。</p>	
<p><準備学習等の指示> クラスで取り上げる原典テキストを熟読し、代表的な註解書などの文献に目を通しておくこと。</p>	
<p><テキスト> Nestle-Aland, Novum Testamentum Graece, 27th edition.</p>	
<p><参考書> 諸マルコ注解書、その他は授業の中でその都度教員が指示する。</p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）> クラスにおける釈義への積極的な参加度と学期末提出のレポートにおける習熟度の評価による。</p>	

聖書神学専攻・新約聖書神学関係	
新約聖書原典釈義 I b	小河 陽
後期・2単位	<登録条件>学期ごとに履修できるが、通年で受講することが望ましい。
<p><授業の到達目標及びテーマ></p> <p>最初に、ルカ福音書の研究史を概観して、釈義上の諸問題を説明する。その後、個々のテキストに即して、釈義上の諸問題を学び、神学内容を吟味するよう訓練する。釈義から説教への展開の可能性も模索する。</p>	
<p><授業の概要></p> <p>前期に引続き、取り上げる若干のテキストをルカの福音書から選び、実際に釈義を行うことで、問題点の把握と解釈の基本を確実にする。最初に簡単に、ルカ福音書の研究史の概観と釈義上の諸問題を学ぶ。参加者各々は分担箇所について発表の義務がある。</p>	
<p><履修条件></p> <p>ギリシア語の基礎知識を必要とするが、絶対条件とはしない。</p>	
<p><授業計画></p> <p>第1回： 前期に於ける釈義の問題と方法の要点を整理・復習する。</p> <p>第2回： ルカ福音書の研究史概観（歴史家、神学者としての著者ルカの評価）</p> <p>第3回： ルカ福音書の研究史概観（ルカの教会とその環境について）</p> <p>第4回： ルカ6：1-6（ナザレの会堂での説教）を中心に釈義を行う。</p> <p>第5回： ルカ5：1-11（漁師を弟子にする）を中心に釈義を行う。</p> <p>第6回： ルカ6：20-49（平地の説教）を中心に釈義を行う。</p> <p>第7回： ルカ7：1-7（百人隊長の僕の癒し）を中心に釈義を行う。</p> <p>第8回： ルカ7：18-35（洗礼者ヨハネとイエス）を中心に釈義を行う。</p> <p>第9回： ルカ7：36-50（罪深い女の赦し）を中心に釈義を行う。</p> <p>第10回： ルカ9：1-6、10：1-12（弟子たちの宣教派遣）を中心に釈義を行う。</p> <p>第11回： ルカ9：18-27（受難予告）を中心に釈義を行う。</p> <p>第12回： ルカ9：28-43a（山上の変貌）を中心に釈義を行う。</p> <p>第13回： ルカ15:11-32(放蕩息子の譬え)を中心に釈義を行う。</p> <p>第14回： 受難と復活についての釈義的諸問題を取り上げる。</p> <p>第15回： 釈義の方法と可能性について、総括的な反省と展望をする。</p>	
<p><準備学習等の指示></p> <p>クラスで取り上げる原典テキストを熟読し、代表的な註解書などの文献に目を通しておくこと。</p>	
<p><テキスト></p> <p>Nestle-Aland, Novum Testamentum Graece, 27th edition.</p>	
<p><参考書></p> <p>ルカの注解書、その他は授業の中で、その都度教員が指示する。</p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）></p> <p>クラスにおける釈義への積極的な参加度と学期末に提出のレポートにおける習熟度の評価による。</p>	

聖書神学専攻・新約聖書神学関係	
新約聖書原典釈義Ⅱ a	遠藤 勝信
前期・2単位	<登録条件>原則として通年(a, b)で登録すること。但し、学期毎履修学生にも対応する。
<p><授業の到達目標及びテーマ></p> <p>ヨハネの福音書4～6章の原典釈義。研究史、釈義の方法論を踏まえつつ、テキストと真摯に向き合う。テキストの文学性、及び歴史との関連性を意識しつつ丁寧に釈義し、神学的考察へと向かう。</p>	
<p><授業の概要></p> <p>はじめに、近年のヨハネ福音書研究の動向(研究史、方法論)を概観し、釈義上の問題及び観点を確認する。その後、参加者による発表とディスカッション。釈義の正確さと共に、慎重な議論の仕方、神学的掘り下げについて学び合う。</p>	
<p><履修条件></p> <p>新約ギリシャ語原典テキスト読解力(ギリシャ語中級文法の知識があることが望ましい)を有すること。</p>	
<p><授業計画></p> <p>I. 講義を中心に</p> <p>第01回 研究史を概観し、近年の研究状況と釈義の諸問題を学ぶ。</p> <p>第02回 ギリシャ語新約聖書本文批評の実際。</p> <p>第03回 テキストの文学批評の実際。</p> <p>第04回 テキストと歴史批評の実際。</p> <p>II. 演習(参加者による釈義の発表とディスカッション)を中心に</p> <p>第05回 ヨハネ4:43～54(役人の息子の癒し)の原典釈義</p> <p>第06回 ヨハネ5:01～09(ベトザタの池での病人の癒し)の原典釈義</p> <p>第07回 ヨハネ5:09～18(安息日論争)の原典釈義</p> <p>第08回 ヨハネ5:19～30(御子の権威)の原典釈義</p> <p>第09回 ヨハネ5:31～40(イエスについての証言ーその1)の原典釈義</p> <p>第10回 ヨハネ5:41～47(イエスについての証言ーその2)の原典釈義</p> <p>第11回 ヨハネ6:01～15(パンのしるし)の原典釈義</p> <p>第12回 ヨハネ6:16～21(湖上歩行)の原典釈義</p> <p>第13回 ヨハネ6:22～33(いのちのパンーその1)の原典釈義</p> <p>第14回 ヨハネ6:34～40(いのちのパンーその2)の原典釈義</p> <p>III. 総括</p> <p>第15回 釈義演習の総括的な反省と展望。</p>	
<p><準備学習等の指示></p> <p>クラスで取り上げる箇所のギリシア語テキストを十分読み、準備してクラスに出席すること。</p>	
<p><テキスト></p> <p>Nestle-Aland (28th ed., 2012), <i>Novum Testamentum Graece</i></p>	
<p><参考書></p> <p>R・ブルトマン著、杉原助訳『ヨハネの福音書』、2005年</p> <p>R・A・カルペッパー著、伊東寿泰訳『ヨハネ福音書文学的解剖』2005年</p> <p>R・ボウカム、浅野淳博訳『イエスとその目撃者たち』2011年</p> <p>C.S. Keener, <i>The Gospel of John- A Commentary vol.1</i>, 2003.</p> <p>M. Endo, <i>Creation and Christology - A Study on the Johannine Prologue</i> (WUNT), 2002. 他、クラスで随時紹介。</p>	
<p><学生に対する評価(方法・基準)></p> <p>授業における発表と期末試験(指定されたテキストについての釈義ペーパー [6,000～8,000文字])。評価には、クラスへの積極的な参加と貢献度を加味する。</p>	

聖書神学専攻・新約聖書神学関係	
新約聖書原典釈義Ⅱb	遠藤 勝信
後期・2単位	<登録条件>原則として通年(a, b)で登録すること。但し、学期毎履修学生にも対応する。
<授業の到達目標及びテーマ> ヨハネの黙示録6～11章の原典釈義。研究史、釈義の方法論を踏まえつつ、テキストと真摯に向き合う。テキストの文学性、及び歴史との関連性を意識しつつ丁寧に釈義し、神学的考察へと向かう。	
<授業の概要> 近年の黙示録研究の動向(研究史、方法論)を概観し、釈義上の問題及び観点を確認する。その後、参加者による発表とディスカッション。釈義の正確さと共に、慎重な議論の仕方、神学的掘り下げについて学び合う。	
<履修条件> 新約ギリシア語原典テキスト読解力(ギリシア語中級文法の知識があることが望ましい)を有すること。	
<授業計画> I. 講義を中心に 第01回 イントロダクション。黙示録の文学ジャンル。 第02回 黙示録を読む前に(その1): 黙示録の周辺、背景理解。 第03回 黙示録を読む前に(その2): 構造と構成、神学、他。 第04回 黙示録1～5章までを概観し、釈義の営みにおける課題と観点を確認する。 II. 演習(参加者による発表とディスカッション)を中心に 第05回 黙示録06:01～08(七つの封印ーその1)の原典釈義 第06回 黙示録06:09～17(七つの封印ーその2)の原典釈義 第07回 黙示録07:01～08(刻印を押されたイスラエルの民)の原典釈義 第08回 黙示録07:09～17(白い衣を着た大群衆)の原典釈義 第09回 黙示録08:01～05(第七の封印の開封)の原典釈義 第10回 黙示録08:06～13(七つのラッパーその1)の原典釈義 第11回 黙示録09:01～12(七つのラッパーその2)の原典釈義 第12回 黙示録09:13～21(七つのラッパーその3)の原典釈義 第13回 黙示録10:01～11(預言者の務めーその1)の原典釈義 第14回 黙示録11:01～14(預言者の務めーその2)の原典釈義 III. 総括 第15回 釈義演習の総括的な反省と展望。	
<準備学習等の指示> クラスで取り上げる箇所のギリシア語テキストを十分読み、準備してクラスに出席すること。	
<テキスト> Nestle-Aland (27 th or 28 th ed., 2012), <i>Novum Testamentum Graece</i>	
<参考書> 佐竹明著『ヨハネの黙示録』(上・中巻)2009年 R・ボウカム著、飯郷友康・小河陽訳『ヨハネ黙示録の神学』2001年 R. Bauckham, <i>The Climax of Prophecy</i> , 1993. R. Bauckham, <i>The Jewish World Around the New Testament</i> , 2008. G. Beale, <i>The Book of Revelation (NIGTC)</i> , 1999. D. Aune, <i>Revelation 6-16 (WBC)</i> , 1997. 他、クラスで随時紹介。	
<学生に対する評価(方法・基準)> 授業における発表と期末試験(指定されたテキストの釈義ペーパー[6,000～8,000文字])。評価には、クラスへの積極的な参加と貢献度を加味する。	

聖書神学専攻・新約聖書神学関係	
修士論文指導演習 新約神学 I	中野 実 焼山 満里子
後期・2単位	<登録条件>新約神学で修論を書く予定の学生
<授業の到達目標及びテーマ>来年度に修士論文を提出する予定の、新約聖書神学専攻の大学院一年生のための演習。テーマの選定、論文を書くための技術を身につける事を目的とする。	
<授業の概要>論文を書くとはどういう事かを学び、その課題に取り組む準備をするためのクラス。毎回学生の発表などを中心にすすめていく。全体としては二人の教員が共に責任を負うが、それぞれが担当学生との個別指導を織り交ぜながら行うこともある。	
<履修条件>2015年9月に修論を提出予定の学生。	
<p><授業計画></p> <ol style="list-style-type: none"> ① オリエンテーション ② 論文を書くとは？ ③ それぞれの課題、問題探し ④ その課題、問題に関連するテキスト探し ⑤ 課題テキストについて深く学ぶ ⑥ テーマの選定、見直し、決定 ⑦ 研究のための方法および道具について ⑧ 資料、先行研究さがし ⑨ 先行研究の学び 参考文献表の作成 ⑩ 先行研究の学びとそこからの展開 ⑪ 問題設定、テーゼの発見へ向かって ⑫ 問題設定、テーゼの吟味 ⑬ 題名、目次作成へ向かって ⑭ 議論の組み立てへ向かって ⑮ まとめ 	
<準備学習等の指示>論文はモノログではないので、教師、学生との対話を大切にすること。	
<テキスト>担当者が必要に応じて、指示する。	
<参考書>担当者が必要に応じて、指示する。	
<学生に対する評価（方法・基準）>クラスへの出席、課題への積極的参加によって、総合的に評価する。	

聖書神学専攻・新約聖書神学関係	
修士論文指導演習 新約神学Ⅱ	中野 実 焼山満里子
前期・2単位	<登録条件>新約神学で修論を書く予定の学生
<p><授業の到達目標及びテーマ>今年度前期末に修士論文を提出予定の大学院二年生で、新約聖書神学専攻の学生のための演習。具体的にそれぞれの修士論文の執筆を助けるような学びをしていく。</p>	
<p><授業の概要>論文の準備段階において、それぞれが研究発表をし、担当者、参加学生の質問、意見などを聞きながら、論文を仕上げていくためのクラス。</p>	
<p><履修条件>2014年9月に新約聖書神学専攻で修士論文を提出する予定の学生。</p>	
<p><授業計画></p> <ol style="list-style-type: none"> ① オリエンテーション 論文執筆の手順などについて ② 問題設定の点検 ③ 資料の点検 ④ 題名、目次、議論の枠組みを整える。 ⑤ より明確な問題設定 ⑥ 序論の執筆 ⑦ 研究史 発表者1 ⑧ 研究史 発表者2 ⑨ 論文のテーゼ 発表者1 ⑩ 論文のテーゼ 発表者2 ⑪ 議論の組み立て 発表者1 ⑫ 議論の組み立て 発表者2 ⑬ 結論 ⑭ 論文のフォーマットの整理：註、文献表など ⑮ まとめ 	
<p><準備学習等の指示>クラスで指示する。</p>	
<p><テキスト>必要に応じて、クラスで指示する。</p>	
<p><参考書>クラスで指示する。</p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）>クラスへの出席、クラスでの課題への積極的参加などによって、総合的に評価する。</p>	

組織神学専攻・組織神学関係	
組織神学特講Ⅱ a	近藤 勝彦
前期・2単位	<登録条件> 学期ごとの履修も可
<p><授業の到達目標及びテーマ> テーマは「救済史の思想史と学説史」、キリスト教的な歴史理解としての救済史の理解を正確にする。</p>	
<p><授業の概要> 「救済史」を聖書と古代教会における成立、また近代における解消に即して辿り、19世紀以来の学説史を検討する。</p>	
<p><履修条件></p>	
<p><授業計画> 第一回、授業概略の説明 第二回、聖書における救済史の萌芽、旧約聖書、フォン・ラートの主張 第三回、新約聖書における救済史の萌芽、パウロ、ルカ文書、ヨハネなどについて 第四回、特にケーゼマンのパウロ研究における「救済史と終末論」 第五回、古代教会における救済史思想の成立、弁証家たちのキリスト教的歴史理解 第六回、エイレナイオスの救済史観 第七回、救済史の近代歴史哲学への解消、レーヴィトなどの理解、歴史の主体について 第八回、救済史概念の出現—ヨハン・クリスティアン・コンラート・ホフマン 第九回、救済史をめぐる諸議論について、① エルンスト・トレルチの歴史的神学 第十回、② カール・バルトの救済史批判、a. 終末論による救済史の解消 b.キリスト論による救済史の解消 第十一回、③ オスカー・クルマンの救済史の理解 第十二回、④ ルドルフ・ブルトマンの救済史の批判 第十三回、救済史をめぐる現代の課題、マルティン・ヘンゲル、クリストーフ・シュベール等の意見も参照しつつ 第十四回、救済史と世界史の関係 第十五回、まとめ</p>	
<p><準備学習等の指示> 講義の中のいずれかに特に興味を持って、理解を深めることに努めるように。</p>	
<p><テキスト></p>	
<p><参考書> オスカー・クルマン『キリストと時』（前田護郎訳、岩波）、その他その都度支持する。</p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）> 講義の中で触れたもののうちから、さらに文献と取り組んでレポート（4000～5000字）を提出すること。興味を持って取り組む姿勢を示すこと。授業参加とレポートの内容によって評価する。</p>	

組織神学専攻・組織神学関係	
組織神学特講Ⅱb	近藤 勝彦
後期・2単位	<登録条件>学期ごとの履修も可
<p><授業の到達目標及びテーマ> テーマは「終末論の諸問題」で、終末論の理解を深めることを目標とする。</p>	
<p><授業の概要> 終末論の変遷史、そしてその喪失を踏まえて、終末論の回復を図り、死と復活、キリストの再臨と最後の審判、神の国の完成と歴史の終りなど、終末論の諸問題の理解を深める。</p>	
<p><履修条件></p>	
<p><授業計画> 第一回、終末論の思想史的概観 第二回、近代における終末論の解消と19世紀の再発見 第三回、各論としての終末論の回復、カール・バルトの初期の問題 第四回、バルトの後期のキリスト論的終末論の問題 第五回、終末論における世界の回復、ルドルフ・ブルトマンの実存論的終末論の問題 第六回、終末論の時間論、時間の終りは時間の中に来る、永遠と時間の始原と終末 第七回、モルトマンの時間論の問題点 第八回、千年王国について、プレミレニアリズムとポストミレニアリズム 第九回、死と復活（個人的終末論） 第十回、キリストの再臨と最後の審判 第十一回、付論として内村鑑三の再臨運動について 第十二回、神の国のまったき到来（教会の完成と人間社会の完成） 第十三回、宇宙的終末論の可能性（新しい天、新しい地） 第十四回、完成におけるキリストと聖霊 第十五回、まとめ</p>	
<p><準備学習等の指示> 講義の中から、それぞれに関心を絞って、理解を深めるようにしてもらいたい。</p>	
<p><テキスト></p>	
<p><参考書> ユルゲン・モルトマン『神の到来』（蓮見和男訳、教文館）など、その都度指示する。</p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）> 関心を持って授業に参加することと、特定なテーマを選び、文献と取り組んでレポート（4000～5000字）を書くことで評価する。</p>	

組織神学専攻・組織神学関係	
組織神学演習Ⅱ a	神代 真砂実
前期・2単位	<登録条件>組織神学演習Ⅱb と通年で履修（登録）することが望ましい。
<p><授業の到達目標及びテーマ> 組織神学関係の重要著作の精読を通して、対象となる思想家の神学思想の世界を理解し、さらには、それを手がかりにして、神学的思考能力を養うことを目的とする。</p>	
<p><授業の概要> 二〇世紀最大の神学者の一人、カール・バルトの『教会教義学』の演習形式による精読を通して、その思想の内容と特色を理解する。今回は創造論中の人間論（第47節「時間の中での人間」）。</p>	
<p><履修条件> （なし）</p>	
<p><授業計画></p> <p>第1回 オリエンテーション、およびバルトの思想の概要の紹介</p> <p>第2回 ①イエス、時間の主（その1）：テキスト 3～25 頁</p> <p>第3回 同（その2）：テキスト 25～41 頁</p> <p>第4回 同（その3）：テキスト 41～57 頁</p> <p>第5回 同（その4）：テキスト 57～82 頁</p> <p>第6回 同（その5）：テキスト 82～105 頁</p> <p>第7回 同（その6）：テキスト 105～123 頁</p> <p>第8回 同（その7）：テキスト 123～146 頁</p> <p>第9回 同（その8）：テキスト 146～160 頁</p> <p>第10回 ②与えられた時間（その1）：テキスト 161～181 頁</p> <p>第11回 同（その2）：テキスト 181～197 頁</p> <p>第12回 同（その3）：テキスト 197～211 頁</p> <p>第13回 同（その4）：テキスト 211～232 頁</p> <p>第14回 同（その5）：テキスト 232～249 頁</p> <p>第15回 同（その6）：テキスト 249～265 頁</p>	
<p><準備学習等の指示> 必ず事前にテキストに目を通して、質問やコメントを用意してくること。</p>	
<p><テキスト> カール・バルト、『教会教義学・創造論Ⅱ／3』、菅田吉・吉永正義訳（新教出版社、オンデマンド）。</p>	
<p><参考書> 授業の中で、必要に応じて指示する。</p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）> 発表と授業への参加度、期末のレポートによる。</p>	

組織神学専攻・組織神学関係	
組織神学演習Ⅱb	神代 真砂実
後期・2単位	<登録条件>組織神学演習Ⅱaと通年で履修（登録）することが望ましい。
<p><授業の到達目標及びテーマ> 組織神学関係の重要著作の精読を通して、対象となる思想家の神学思想の世界を理解し、さらには、それを手がかりにして、神学的思考能力を養うことを目的とする。</p>	
<p><授業の概要> 二〇世紀最大の神学者の一人、カール・バルトの『教会教義学』の演習形式による精読を通して、その思想の内容と特色を理解する。今回は創造論中の人間論。</p>	
<p><履修条件> （なし）</p>	
<p><授業計画> 第1回 オリエンテーション ③限られた時間（その1）：テキスト266～280頁 第2回 同（その2）：テキスト280～296頁 第3回 同（その3）：テキスト296～310頁 第4回 ④始まる時間（その1）：テキスト311～325頁 第5回 同（その2）：テキスト325～331頁 第6回 同（その3）：テキスト331～343頁 第7回 ⑤終わる時間（その1）：テキスト344～358頁 第8回 同（その2）：テキスト358～369頁 第9回 同（その3）：テキスト369～388頁 第10回 同（その4）：テキスト388～409頁 第11回 同（その5）：テキスト409～418頁 第12回 同（その6）：テキスト418～428頁 第13回 同（その7）：テキスト429～448頁 第14回 同（その8）：テキスト448～462頁 第15回 まとめ</p>	
<p><準備学習等の指示> 必ず事前にテキストに目を通して、質問やコメントを用意してくること。</p>	
<p><テキスト> カール・バルト、『教会教義学・創造論Ⅱ／3』、菅田吉・吉永正義訳（新教出版社、オンデマンド）。</p>	
<p><参考書> 授業の中で、必要に応じて指示する。</p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）> 発表と授業への参加度、期末のレポートによる。</p>	

組織神学専攻・組織神学関係	
組織神学演習Ⅲ a	芳賀 力
前期・2単位	<登録条件> 通年(a, b)の登録が望ましい。
<p><授業の到達目標及びテーマ> 前期は A.E.マクグラスの『「自然」を神学する ― キリスト教自然神学の展開』をテキストとして、新しい自然神学の可能性を探る意欲的な試みを検討・吟味する。</p>	
<p><授業の概要> 最初の2回はオリエンテーション的な意味で、主題に関する問題を整理する。その後担当を決め、順番に内容を要約し、コメントしてもらい、討論する。</p>	
<p><履修条件> 聖書神学専攻でもかまわない。</p>	
<p><授業計画></p> <p>第1回：パルトとブルナーのイマゴ・デイ論争を通して自然神学の問題点を整理する。</p> <p>第2回：信仰と自然科学とのあるべき関係を整理する。</p> <p>第3回：テキスト第1章の内容を検討する。</p> <p>第4回：テキスト第2章の内容を検討する。</p> <p>第5回：テキスト第3章の内容を検討する。</p> <p>第6回：テキスト第4章の内容を検討する。</p> <p>第7回：テキスト第5章の内容を検討する。</p> <p>第8回：テキスト第6章の内容を検討する。</p> <p>第9回：テキスト第7章の内容を検討する。</p> <p>第10回：テキスト第8章1節から6節までの内容を検討する。</p> <p>第11回：テキスト第8章7節から第9章の内容を検討する。</p> <p>第12回：テキスト第10章の内容を検討する。</p> <p>第13回：テキスト第11章の内容を検討する。</p> <p>第14回：テキスト第12章の内容を検討する。</p> <p>第15回：これまでの議論を振り返り、総括する。</p>	
<p><準備学習等の指示> 前もってテキストをよく読んでくること。</p>	
<p><テキスト> A.E.マクグラス『「自然」を神学する ― キリスト教自然神学の展開』教文館、2011年。各自購入すること。</p>	
<p><参考書> 必要に応じて授業の中で紹介する。</p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）> 学期末にレポートを提出してもらう。</p>	

組織神学専攻・組織神学関係	
組織神学演習Ⅲ b	芳賀 力
後期・2単位	<登録条件> 通年(a, b)の登録が望ましい。
<p><授業の到達目標及びテーマ> 後期は創造論をめぐる様々なテーマを個別に取り上げ、順番に考察してゆく。各論的考察を積み重ねて、創造論の全体を網羅することが期待される。</p>	
<p><授業の概要> こちらでペーパーを用意し、解説する。それに基づいて意見を出し合い、神学的理解を深める。</p>	
<p><履修条件> 聖書神学専攻でもかまわない。</p>	
<p><授業計画></p> <p>第1回：自然の読解法について考える。</p> <p>第2回：自然の非神話化について考える。</p> <p>第3回：世界観としてのグノーシス・シンドロームについて考える。</p> <p>第4回：自然科学の説明をいかに越えるかを考える。</p> <p>第5回：開かれた創造と進化論について考える。</p> <p>第6回：創造の根拠について考える。</p> <p>第7回：創造とキリスト論について考える。</p> <p>第8回：創造と聖霊論について考える。</p> <p>第9回：一般恩恵と特別恩恵について考える。</p> <p>第10回：神の像としての人間について考える。</p> <p>第11回：関係の中の人間について考える（1）。</p> <p>第12回：関係の中の人間について考える（2）。</p> <p>第13回：自然の中の人間について考える。</p> <p>第14回：創造と神義論的問いについて考える。</p> <p>第15回：これまでの議論を振り返り、総括する。</p>	
<p><準備学習等の指示> 前の週にテキストが指示された場合には、その箇所を図書館で各自コピーし目を通しておくことが望ましい。</p>	
<p><テキスト> 季刊『教会』（QK）の諸論文。授業の中で指示する。</p>	
<p><参考書> 必要に応じて授業の中で紹介する。</p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）> 学期末にレポートを提出してもらう。</p>	

組織神学専攻・組織神学関係	
信条学	芳賀 力
前期・2単位	<登録条件> 専攻に関係なく登録可。
<p><授業の到達目標及びテーマ> 歴史的教会の生み出した諸信条の特色を学ぶ。また教義学の項目に沿って、信条の神学を学ぶ。</p>	
<p><授業の概要> 最初は古代教会の基本信条を取り上げ、次いで宗教改革期の代表的な信条を顧みる。なお授業の後半でロールスのテキストの各項目を一つずつ読み、実際に信条本文に触れながら、その神学的意味を考える。</p>	
<p><履修条件> 大学院博士課程前期・後期に在籍している者は誰でも履修できる。</p>	
<p><授業計画></p> <p>第1回：信条・信仰告白とは何かを押さえた上で、使徒信条を学ぶ。</p> <p>第2回：ニケア・コンスタンティノポリス信条を学ぶ。またロールスのテキスト「啓示、神の言葉、伝統」の項目を読む。</p> <p>第3回：アタナシオス信条を学ぶ。またロールスのテキスト「神の本性と三位一体論」の項目を読む。</p> <p>第4回：カルケドン信条を学ぶ。またロールスのテキスト「創造と摂理」の項目を読む。</p> <p>第5回：ルター大・小教理問答を学ぶ。またロールスのテキスト「人間と罪」の項目を読む。</p> <p>第6回：アウグスブルク信仰告白を学ぶ。またロールスのテキスト「恵みの契約と和解」の項目を読む。</p> <p>第7回：ジュネーヴ教会信仰問答を学ぶ。またロールスのテキスト「キリスト論とカルヴァン主義的な外部」の項目を読む。</p> <p>第8回：フランス信仰告白を学ぶ。またロールスのテキスト「義認と信仰」の項目を読む。</p> <p>第9回：第一・第二スイス信仰告白を学ぶ。またロールスのテキスト「聖化と悔改め」の項目を読む。</p> <p>第10回：スコットランド信仰告白を学ぶ。またロールスのテキスト「選びと棄却」の項目を読む。</p> <p>第11回：ハイデルベルク信仰問答を学ぶ。またロールスのテキスト「教会とそのしるし」の項目を読む。</p> <p>第12回：ドルト信仰規準を学ぶ。またロールスのテキスト「御言葉と聖礼典」の項目を読む。</p> <p>第13回：ウェストミンスター信仰告白を学ぶ。またロールスのテキスト「神の言葉の二様態」の項目を読む。</p> <p>第14回：バルメン宣言を学ぶ。またロールスのテキスト「洗礼」の項目を読む。</p> <p>第15回：日本基督教団信仰告白を学ぶ。またロールスのテキスト「聖餐」の項目を読む。</p>	
<p><準備学習等の指示> 前もってその時の信条テキストに目を通しておくとよい。教室で渡す資料をよく整理しておくこと。</p>	
<p><テキスト> 『信条集 前後篇』新教出版社、1994年。各自購入すること。またJ・ロールス『改革教会信仰告白の神学』一麦出版社、2009年。研究室にて割引価格で頒布する。</p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）> 出席と授業での発表、レポートを総合的に評価する。</p>	

組織神学専攻・組織神学関係	
修士論文指導演習 組織神学 I	芳賀 力
後期・2単位	<登録条件> 組織神学専攻で組織神学もしくは実践神学で2015年度に修士論文提出を希望する者。
<授業の到達目標及びテーマ> 修士論文を執筆するための準備をする。	
<授業の概要> 学術論文を執筆するためのガイダンスを行いながら、各自のテーマの設定、問題意識の明確化、主要文献の確定、二次資料の収集、文献の読解とその報告を順次行う。	
<履修条件> 狭義の組織神学もしくは実践神学の分野で、2015年度に修士論文を提出しようとする者。	
<授業計画> 第1回：組織神学の修士論文を執筆するためのガイダンスを行う。 第2回：修士論文計画書に基づく関心と問題意識の提示（1） 第3回：修士論文計画書に基づく関心と問題意識の提示（2） 第4回：修士論文計画書に基づく関心と問題意識の提示（3） 第5回：主要文献および二次資料の確定と収集（1） 第6回：主要文献および二次資料の確定と収集（2） 第7回：主要文献および二次資料の確定と収集（3） 第8回：基本文献の読書レポート・中間報告（A1） 第9回：基本文献の読書レポート・中間報告（A2） 第10回：基本文献の読書レポート・中間報告（A3） 第11回：基本文献の読書レポート・中間報告（B1） 第12回：基本文献の読書レポート・中間報告（B2） 第13回：基本文献の読書レポート・中間報告（B2） 第14回：これまでの見直しと今後の見直し（1） 第15回：これまでの見直しと今後の見直し（2）	
<準備学習等の指示> 図書館書庫に入って、文献を渉猟し、また先行研究（修士論文）をよく参考にすること。	
<テキスト> 特になし	
<参考書> 特になし	
<学生に対する評価（方法・基準）> 発表内容および授業への参加の度合いを評価する。	

組織神学専攻・組織神学関係	
修士論文指導演習 組織神学Ⅱ	芳賀 力
前期・2単位	<登録条件> 組織神学専攻で組織神学もしくは実践神学で2014年度に修士論文提出を希望する者。
<授業の到達目標及びテーマ> 修士論文を執筆し、期日までに完成させる。	
<授業の概要> 論文の構成を勘案して目次を作成しながら、順番に進捗状況を報告してもらい、問題点を適宜指摘し、必要なアドバイスをを行い、討論する。	
<履修条件> 狭義の組織神学もしくは実践神学の分野で、2014年度に修士論文を提出しようとする者。	
<授業計画> 第1回：進捗状況と今後の見通し（1） 第2回：進捗状況と今後の見通し（2） 第3回：進捗状況と今後の見通し（3） 第4回：A段階・中間発表（1） 第5回：A段階・中間発表（2） 第6回：A段階・中間発表（3） 第7回：B段階・中間発表（1） 第8回：B段階・中間発表（2） 第9回：B段階・中間発表（3） 第10回：C段階・中間発表（1） 第11回：C段階・中間発表（2） 第12回：C段階・中間発表（3） 第13回：D段階・最終発表（1） 第14回：D段階・最終発表（2） 第15回：D段階・最終発表（3）	
<準備学習等の指示> 指導教授の指示をよく仰ぐこと。	
<テキスト> 特になし	
<参考書> 特になし	
<学生に対する評価（方法・基準）> 発表内容および授業への参加の度合いを評価する。論文の提出をもって終了する。	

組織神学専攻・歴史神学関係	
教理史演習Ⅱ a	棚村 重行
前期・2単位	<登録条件> 通年の履修が望ましい。
<p><授業の到達目標及びテーマ> 「英米日・福音主義の歴史—神学・信仰復興・教会形成」。英米日の教会関係史のコンテキストにおいて、17世紀～20世紀の主要な信仰復興・教会形成の福音主義神学の第一次史料テキストを読み、歴史洞察を深める。</p>	
<p><授業の概要> 前期では、最初に日本の「福音主義の歴史」研究の批評を行う。その上で「国際教会関係史」の観点を確立し、17～19世紀前半（1650-1860）までの英米のピューリタニズム移植、第一次、第二次大覚醒運動期の福音主義神学と信仰復興運動論、教会形成史について講義と史料分析を行う。</p>	
<p><履修条件> 現代・近代プロテスタント神学思想の基本的な知識、あるいは英米教会史・神学思想史などのある程度の関心と素養が必要である。</p>	
<p><授業計画> 第1回：コース紹介。導入講義：日本の「福音主義」「福音主義の歴史」研究の批評(佐藤敏、古屋、青木他) 第2回：講義（一）：アメリカ教会史と神学思想史論の吟味：F. ボンヘッフアー、W. G. マックラクリン他。 第3回：史料分析（一）：17～18世紀「ピューリタン大覚醒」（T. フッカー）と英国メソジズム（ウェスレー） 第4回：講義（二）：18世紀北米における「第一次大覚醒運動」（1730～1760）植民地時代の三大教派の出現 第5回：史料分析（二）：J. エドワーズ（1）：「[ニューイングランド信仰復興の] 忠実な報告」 第6回：史料分析（三）：J. エドワーズ（2）：「信仰復興についての幾つかの考察」 第7回：講義（三）：18世紀北米のメソジズム神学、信仰復興、教会形成：A. クラーク、N. バングス 第8回：講義（四）：19世紀前半の「第二次大覚醒運動」（1800～1830）開拓時代の三大教派成長（ベアード） 第9回：史料分析（四）：19世紀前半の新派カルヴァン主義神学の誕生：N. W. テイラー、L. ビーチャー 第10回：史料分析（五）：C. G. フィニー（1）：回心についての説教、「組織神学」から 第11回：史料分析（六）：C. G. フィニー（2）：「宗教の復興とは何か？」 第12回：史料分析（七）：長老派内の新派カルヴァン主義：A. バーンズ 「救いの道」 第13回：史料分析（五）：メソジストの神学、信仰復興、教会形成：P. カートライト、D. D. ウィードン 第14回：講義（五）：幕末開国期日本：改革派-長老派-会衆派型およびメソジスト型「二つの福音」問題 第15回：講義（六）：若き植村正久、本多庸一：福音主義神学、信仰復興、教会形成。FD実施。</p>	
<p><準備学習等の指示> テキストの予習と、史料分析の復習が大切である。</p>	
<p><テキスト> ①W. G. McLoughlin, <i>The American Evangelicals, 1800-1900</i>, Harper and Low, 1968(コピー本で配布)。②W. G. McLoughlin, <i>Revivals, Awakenings, and Reform</i>, University of Chicago Press, 1978(部分的にコピー資料として配布)。</p>	
<p><参考書>① S. E. オールストローム『アメリカ神学思想史入門』（教文館、1990）。②青木保憲『アメリカ福音派の歴史』（明石書房、2013）。③McLoughlin, <i>Modern Revivalism</i>, Wifp and Stock, 2004. ④S. Ahlstrom, <i>Theology in America</i>, Hackett Publ. com., 1967;2003. ④棚村重行『二つの福音は波濤を越えて』（教文館、2009）。</p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）> 1. 授業における積極的な討論や質疑応答への参加を重視する。また期末には、以下の要件を満たす研究レポートを作成し提出すること。 2. 前期で扱ったテーマを一つ取り上げ、それに関連した重要な第一次史料を批判的に分析し自分の解釈にもとづくレポートを作成せよ。分量は400字詰め原稿用紙に換算して20-25枚以内。</p>	

組織神学専攻・歴史神学関係	
教理史演習Ⅱ b	棚村 重行
後期・2単位	<登録条件> 前期に同じ。
<p><授業の到達目標及びテーマ> 「英米日・福音主義の歴史—神学・信仰復興・教会形成」。英米日の教会関係史のコンテキストにおいて、17世紀～20世紀の主要な信仰復興・教会形成の福音主義神学の第一次史料テキストを読み、歴史洞察を深める。</p>	
<p><授業の概要> 後期では、19世紀半～20世紀（1860～2000）までの英米の「第三次大覚醒運動」から二十世紀のビリー・グラハムを中心とする「第四次大覚醒」およびそれ以後の福音主義神学と信仰復興運動論、教会形成史について講義と史料分析を行う。</p>	
<p><履修条件> 前期に同じ。</p>	
<p><授業計画> 第1回：コースの紹介。講義（一）「マックラクリンの北米大覚醒運動史」のおさらい 第2回：講義（二）：19世紀後半の北米神学の諸相：H.W. ビーチャー、H. ブッシュネル、P. ブルックス 第3回：史料分析（一）：19世紀後半の「第三次大覚醒運動」（1890～1920）「都市の信仰復興」（J. ストロング） 第4回：史料分析（二）：D. L. ムーディー(1)：ムーディーの諸説教にみる福音主義神学と教会 第5回：史料分析（三）：D.L. ムーディー(2)：彼の信仰復興論「教会に行かぬ人に福音をどう届けるか？」 第6回：史料分析（四）：S.P. ジョーンズ：説教「個人的な聖別：『あなたの卑しさを放棄せよ』」 第7回：講義（三）：20世紀初頭の日本の「大挙伝道」および「神の国」運動：植村正久および賀川豊彦 第8回：講義（四）：20世紀前半の第一次世界大戦後の北米の「近代主義」対「根本主義」論争 第9回：史料分析（五）：上記論争に関する第一次史料 第10回：講義（五）：20世紀後半の「第四次大覚醒〔戦後信仰復興〕運動」（1960～1990?） 第11回：史料分析（六）：ビリー・グラハム（1） 第12回：史料分析（七）：ビリー・グラハム(2) 第13回：講義（六）：第二次世界大戦後日本における「戦後信仰復興運動」の神学、信仰復興、教会形成。 第14回：講義（七）：1980年代後の英米日の福音主義諸派の動向：北米の「宗教的右派」、「福音派」の動向。 第15回：総合討論：通年の学びからみた「福音主義」とその歴史の総括。FD実施。</p>	
<p><準備学習等の指示> 前期に同じ。</p>	
<p><テキスト>①W. G. Mcloughlin, <i>The American Evangelicals, 1800-1900</i>, Harper and Low, 1968(コピー本で配布)。②W.G. Mcloughlin, <i>Revivals, Awakenings, and Reform</i>, University of Chicago Press, 1978(部分的にコピー資料として配布)。その他。</p>	
<p><参考書>① S. E. オールストローム『アメリカ神学思想史入門』（教文館、1990）。②青木保憲『アメリカ福音派の歴史』（明石書房、2013）。③Mcloughlin, <i>Modern Revivalism</i>, Wifp and Stock, 2004. ④S. Ahlstrom, <i>Theology in America</i>, Hackett Publ. com., 1967;2003. ④棚村重行『二つの福音は波濤を越えて』（教文館、2009）。</p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）> 1. 授業における積極的な討論や質疑応答への参加を重視する。また期末には、以下の要件を満たす研究レポートを作成し提出すること。 2. 前期で扱ったテーマを一つ取り上げ、それに関連した重要な第一次史料を批判的に分析し自分の解釈にもとづくレポートを作成せよ。分量は400字詰め原稿用紙に換算して、20～25枚以内。</p>	

組織神学専攻・歴史神学関係	
教会史特講Ⅱ a	棚村 重行
前期・2単位	<登録条件> 通年の履修が望ましい。
<p><授業の到達目標及びテーマ> 「キリスト教霊的生活史」。「宗教としてのキリスト教」を構成する宗教経験、教理神学、実践、共同体などの諸側面を総合して「霊的生活」と呼び、教会史におけるその発展を歴史的に考察する。</p>	
<p><授業の概要> 前期では、聖書成立時代から中世末期までの霊的神学者の a)「三一神の像、似像」としての人間の創造、墮罪、回復の救済史観、b) 礼拝と祈り、とくに祈りに焦点をあて講義し、配布テキストを読む。</p>	
<p><履修条件> 霊的生活思想形成における聖書釈義の役割も重視するので、組織専攻者（組織、歴史、実践）のみならず、聖書神学専攻者の参加も歓迎する。</p>	
<p><授業計画></p> <p>第1回：参加者の目標と関心の共有。コースの紹介と導入講義「霊的生活と霊性とは何か？」</p> <p>第2回：講義：聖書正典における「神の像、似像」としての人間と救済史観（新共同訳聖書）</p> <p>第3回：発表（一）：新約聖書における礼拝：0.クルマン『原始キリスト教と礼拝』から</p> <p>第4回：発表（二）：新約聖書における「祈り」：0.クルマン『新約聖書における祈り』から</p> <p>第5回：史料分析（一）：古代東方教会：オリゲネスの神の像と救済史観、礼拝と祈り</p> <p>第6回：史料分析（二）：古代東方教会：アタナシオスの神の像と救済史観、礼拝と祈り</p> <p>第7回：史料分析（三）：古代西方教会：アウグスティヌス：神の像と救済史観、礼拝と祈り観</p> <p>第8回：史料分析（四）：古代末期～初期中世教会：ヌルシアのベネディクトゥス：修道制の理念</p> <p>第9回：史料分析（五）：盛期中世教会：カンタベリーのアンセルムス：礼拝と祈り、神の像と救済史観</p> <p>第10回：史料分析（六）：盛期中世教会：クレルヴォーのベルナルドゥス：神の像と救済史観、礼拝と祈り</p> <p>第11回：史料分析（七）：盛期中世教会：サン・ヴィクトールのリカルドゥス：神の像と救済史、祈り</p> <p>第12回：史料分析（八）：盛期中世教会：アッシジのフランチェスコ、ボナヴェントゥーラ：神の像と救済史観、礼拝と祈り</p> <p>第13回：史料分析（九）：盛期中世教会：トマス・アキナス：神の像と救済史観、礼拝と祈り</p> <p>第14回：史料分析（十）：後期中世教会：ヨハンネス・タウラー：神の像と救済史観、礼拝と祈り</p> <p>第15回：前期のまとめと総合討論。</p>	
<p><準備学習等の指示> 授業の中で指示する。原則として、予習よりも復習を重視せよ。</p>	
<p><テキスト> 0. クルマン『新約聖書における祈り』、教文館、1999（現在書店で購入可能）。同『原始キリスト教と礼拝』（コピー・テキスト）。その他の多くの史料は、授業毎にコピー・テキストの形で配布する。</p>	
<p><参考書></p> <p>J. マッコリー『礼拝と祈りの本質—新たな霊性の探求』（ヨルダン社）。D. F. Ford, <i>Self and Salvation</i>, Cambridge U. P., 1999.</p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）></p> <p>1. 平生の授業と討論に積極的に参加する。また学期末には、以下の要件をみたす研究レポートを作成し提出する。分量は400字詰め原稿用紙で20～25枚以内。</p> <p>2. レポートの内容は次の通り。a) 興味を持つ二人の人物ないし運動を選び、彼らの二次史料を読み、時代背景を調べよ。b) また彼らの第一次史料を精読し、比較して分析し、自分の解釈と評価を与えたレポートとせよ。</p>	

組織神学専攻・歴史神学関係	
教会史特講Ⅱ b	棚村 重行
後期・2単位	<登録条件> 通年の履修が望ましい。
<p><授業の到達目標及びテーマ> 「キリスト教霊的生活史」。「宗教としてのキリスト教」を構成する宗教経験、教理神学、実践、共同体などの諸側面を総合して「霊的生活」と呼び、教会史におけるその発展を歴史的に考察する。</p>	
<p><授業の概要> 後期では、宗教改革時代から現代までの霊的神学者の a) 「三一神の像、似像」としての人間の創造、墮罪、回復の救済史観、b) 礼拝と祈り、とくに祈りに焦点をあて講義し、配布テキストを読む。</p>	
<p><履修条件> 前期に同じ。</p>	
<p><授業計画> 第1回：コースの紹介。参加者の目標や関心を共有する話し合い。 第2回：発表—P. T. フォーサイス『祈りの精神』の発表と討論 第3回：史料分析（一）：十六世紀ドイツ宗教改革（1）：M. ルターの神の像と救済史観 第4回：史料分析（二）：十六世紀ドイツ宗教改革（2）：M. ルターの神の礼拝と祈り観 第5回：史料分析（三）：十六世紀スイス宗教改革（1）：J. カルヴァンの神の像と救済史観 第6回：史料分析（四）：十六世紀スイス宗教改革（2）：J. カルヴァンの礼拝と祈り観 第7回：史料分析（五）：十六世紀対抗宗教改革：トレント公会議の救済観と I. ロヨラの『霊操』の祈り観 第8回：史料分析（六）：十七世紀ドイツ敬虔主義（1）：J. アルントの神の像と救済史観、礼拝と祈り 第9回：史料分析（七）：十八世紀ドイツ敬虔主義（2）：P. シュペーナーと A. フランケの救済観、祈り 第10回：史料分析（八）：十八世紀英国の敬虔主義：J. ウェスレーの神の像と救済史観、礼拝と祈り 第11回：史料分析（九）：十八～十九世紀米国の大覚醒運動：J. エドワーズと C. フィニーの救済観、祈り 第12回：史料分析（十）：十九世紀日本の霊的神学者：植村正久と逢坂元吉郎の救済観、礼拝と祈り 第13回：史料分析（十一）：二十世紀スイス神学：K. バルトの神の像と救済史観、祈りと神学 第14回：史料分析（十二）：二十世紀スイス神学：E. ブルンナーの神の像と救済史観、祈りと礼拝 第15回：史料分析（十三）：現代神学：ポスト・モダンの神学者の神の像と救済史観、祈り観、総合討論。</p>	
<p><準備学習等の指示> 前期に同じ。</p>	
<p><テキスト> すべての史料は、授業毎にコピー・テキストの形で配布する。</p>	
<p><参考書> P. T. フォーサイス『祈りの精神』、ヨルダン社、1978)。J. マッコリー『礼拝と祈りの本質—新たな霊性の探求』(ヨルダン社)。D. F. Ford, <i>Self and Salvation</i>, Cambridge U. P., 1999.</p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）> 1. 平生の授業と討論に積極的に参加する。また学期末には、以下の要件をみたす研究レポートを作成し提出する。分量は400字詰め原稿用紙で20～25枚以内。 2. レポートの内容は次の通り。a) 興味を持つ二人の人物ないし運動を選び、彼らの二次史料を読み、時代背景を調べよ。b) 彼らの第一次史料を精読し、比較して分析し、自分なりの解釈と評価を与えたレポートとせよ。</p>	

組織神学専攻・歴史神学関係	
教理史特講Ⅱ a	関川 泰寛
前期・2単位	<登録条件> 特になし
<p><授業の到達目標及びテーマ></p> <p>キリスト教教理史の主題を定めて、一次史料に基づいて講義する。一次史料を十分理解して、各時代のキリスト教教理の特色を把握することを目標とする。</p>	
<p><授業の概要></p> <p>宗教改革者ジャン・カルヴァンの生涯と神学について学ぶ。特に『キリスト教綱要』Ⅰ～Ⅱの神論とキリスト論、聖霊論を読んで、カルヴァン神学の特色をつかむ。</p>	
<p><履修条件></p> <p>特になし</p>	
<p><授業計画></p> <p>第1回：宗教改革の時代概観：ルターからツヴィングリまで</p> <p>第2回：宗教改革運動の諸相―再洗礼派や熱狂主義</p> <p>第3回：カルヴァンの生涯（1）生誕から『キリスト教綱要』（初版）出版まで</p> <p>第4回：カルヴァンの生涯（2）第一次ジュネーヴ滞在からストラースブルク時代</p> <p>第5回：カルヴァンの生涯（3）ジュネーヴでの活動再開と改革運動の深化</p> <p>第6回：カルヴァンの著作解題</p> <p>第7回：カルヴァン神学の研究史概観</p> <p>第8回：カルヴァン 『キリスト教綱要』を読む（1）神論Ⅰ 神認識</p> <p>第9回：カルヴァン 『キリスト教綱要』を読む（2）神論Ⅱ 聖書と神認識</p> <p>第10回：カルヴァン 『キリスト教綱要』を読む（3）キリスト論Ⅰ 律法と福音、キリストの三職</p> <p>第11回：カルヴァン 『キリスト教綱要』を読む（4）キリスト論Ⅱ 贖罪</p> <p>第12回：カルヴァン 『キリスト教綱要』を読む（5）聖霊論Ⅰ 信仰義認</p> <p>第13回：カルヴァン 『キリスト教綱要』を読む（6）聖霊論Ⅱ</p> <p>第14回：カルヴァン 『キリスト教綱要』を読む（7）聖霊論Ⅲ</p> <p>第15回：全体に関わる質疑応答とディスカッション</p>	
<p><準備学習等の指示></p> <p>渡辺信夫『カルヴァン』（人と思想シリーズ、清水書院）を読んでおくこと。</p>	
<p><テキスト></p> <p>カルヴァン『キリスト教綱要』1・2篇（渡辺信夫訳、改訳版、新教出版社）</p>	
<p><参考書></p> <p>ニーゼル『カルヴァンの神学』他。教室で指示する。</p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）></p> <p>積極的授業態度と演習の発表の内容、小論文を総合して評価する。</p>	

組織神学専攻・歴史神学関係	
修士論文指導演習 歴史神学Ⅰ	棚村 重行
後期・2単位	<登録条件> 歴史神学の専攻者。
<授業の到達目標及びテーマ> 歴史神学の研究と論文作成の技法を習得する。	
<授業の概要> 後期のセミナーでは、前半は下記のテキストを読み、研究や論文作成の技法を学ぶ。後半では、各自の研究テーマについて中間報告を一回行い、学期末には研究レポートを作成、提出する。	
<履修条件> 歴史神学専攻の大学院修士1年次生を対象とする。	
<p><授業計画></p> <p>第1回 コースの紹介。各自の研究テーマの紹介。</p> <p>第2回 導入講義「歴史神学とはなにか？」</p> <p>第3回 発表（一） 澤田『論文の書き方』第一章</p> <p>第4回 発表（二） 上記テキスト、第二章</p> <p>第5回 発表（三） 同上、第三章</p> <p>第6回 発表（四） 同上、第四章</p> <p>第7回 発表（五） 同上、第五章</p> <p>第8回 発表（六） 同上、第六章</p> <p>第9回 発表（七） 同上、第七章</p> <p>第10回 発表（八） 同上、第八章</p> <p>第11回 中間発表（一） 二名</p> <p>第12回 同上（二） 二名</p> <p>第13回 同上（三） 二名</p> <p>第14回 同上（四） 二名</p> <p>第15回 総合討論、FD実施。</p>	
<準備学習等の指示> テキストは予め読んでおくこと。	
<テキスト> 澤田昭夫『論文の書き方』、講談社学術文庫、2004年。	
<参考書> J.H. アーノルド『一冊でわかる 歴史』、岩波書店、2006年。	
<p><学生に対する評価（方法・基準）></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 平生の討論参加の積極性、出席、期末レポートの評価を総合して評点を与える。 2. 期末レポートは、原稿用紙400字詰めに換算して、20～25枚以内で作成し、提出せよ。 	

組織神学専攻・歴史神学関係	
修士論文指導演習 歴史神学Ⅱ	棚村 重行
前期・2単位	<登録条件> 歴史神学の専攻者。
<授業の到達目標及びテーマ> 大学院修士課程二年次の学生に開講される修士論文準備コース。	
<授業の概要> 前半では、下記の最新の歴史研究入門書を読む。その後修士論文提出予定者が各自のテーマにもとづき、二回修士論文の中間発表を行う。教師と参加者は、質疑応答やコメントを通して、各自の準備を助ける。	
<履修条件> 原則として歴史神学専攻で修士課程二年次の学生の履修を求める。	
<p><授業計画></p> <p>第1回 コースの紹介と発表の決定。</p> <p>第2回 導入講義「歴史神学の研究視点」</p> <p>第3回 歴史学入門テキスト発表（一）、 『一冊でわかる 歴史』 1, 2章</p> <p>第4回 同上（二）、同上書 3, 4章</p> <p>第5回 同上（三）、同上書 5, 6章</p> <p>第6回 同上（四）、同上書、7章と全体討論。</p> <p>第7回 第一次発表（一） 二名。とくに論文のテーマや構成、方法論、参考文献など。</p> <p>第8回 同上（二） 二名発表。</p> <p>第9回 同上（三） 二名発表。</p> <p>第10回 同上（四） 一～二名発表。</p> <p>第11回 第二次発表（一） 二名発表。</p> <p>第12回 同上（二） 二名発表。</p> <p>第13回 同上（三） 二名発表。</p> <p>第14回 同上（四） 一～二名発表。</p> <p>第15回 総合討論。FD実施。</p>	
<準備学習等の指示> テキストは予め読んで意見をまとめよ。	
<テキスト> J.H.アーノルド『一冊でわかる 歴史』岩波書店、2006年。	
<参考書> 後に授業で紹介する。	
<学生に対する評価（方法・基準）> 授業参加態度、出席、発表の内容など総合して評価を与える。	

組織神学専攻・実践神学関係	
キリスト教教育特講 a	朴 憲郁
前期・2単位	<登録条件>
<p><授業の到達目標及びテーマ></p> <p>日本の教会・学校におけるキリスト教教育の課題を、広く「宗教と教育」の観点から歴史的、全体的に把握し、その後、このテーマをキリスト教教育学的に考察する。それによって今日の実践的取り組みに役立てたい。</p>	
<p><授業の概要></p> <p>最初に、明治以降の近代日本は「宗教と教育」の課題にどう取り組んだかを歴史的に考察し、次に、それをテーマ別に取り上げ、最後に、このテーマを神学的・宗教教育学的に考察して一人の方向性を探る。</p>	
<p><履修条件></p> <p>特になし</p>	
<p><授業計画></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 近代日本の宗教と教育 2. 明治前半期のプロテスタント教会と宗教教育 3. カトリックの宗教教育－明治期を中心に－ 4. 明治前期の仏教教育の目指したもの－僧侶養成など－ 5. 新宗教団体の宗教教育への進出 6. 自由キリスト教と宗教教育 7. 宗教と「倫理・道徳」教育 8. 霊性と人格教育 9. 心の教育と倫理 10. 民主主義と市民的美徳 11. カトリック教育史にみる宗教教育者養成 12. ポストモダンのスピリチュアル運動とファンダメンタリズム復興の危機 13. 日本人の宗教心と教育の将来 14. 聖霊神学と人間教育 15. プロテスタント・キリスト教教育学的考察－総括－ 	
<p><準備学習等の指示></p> <p>毎回の授業で受講生が順次発表するが、非発表者も次回扱うテキスト箇所を事前に読んでおくこと。</p>	
<p><テキスト></p> <p>井上順孝責任編集、『宗教と教育』、弘文堂、1997年(H9年)、および森一弘、他、編、『教会と学校での宗教教育再考』1、オリエンツ宗教研究所、2009年。各自購入を求めるが、絶版の場合は担当講師が用意する。</p>	
<p><参考書></p> <p>授業時に随時、紹介する。</p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）></p> <p>授業数の2/3以上の出席を前提として、各自の発表と毎回の授業参加度、およびレポート提出を評価する。</p>	

組織神学専攻・実践神学関係	
キリスト教教育特講 b	朴 憲郁
後期・2単位	<登録条件>
<p><授業の到達目標及びテーマ></p> <p>宗教改革後の正統主義派に抗して起こった敬虔主義運動の中に、理論と実践における優れた教育的貢献を見ることができる。近代教育の創始者といわれるモラヴィア派のコメニウスはそこから排出された。それらの経緯と内的関連を考察する。</p>	
<p><授業の概要></p> <p>敬虔主義運動の中心に立つモラヴィア兄弟団とそこから多大な影響を受けたジョン・ウェスレーの神学思想の特徴を見、それが必然的に教育的展開をもち、日曜学校運動へと繋がることを跡づけ、確認していく。</p>	
<p><履修条件></p> <p>特になし</p>	
<p><授業計画></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 敬虔主義と教育一序説 2. ドイツ敬虔主義の創始者 Ph. J. シュペーナーの主張 3. A.H.フランケのキリスト教的人間形成理論 4. N.L.ツィンツェンドルフによる継承と発展ー神学と教育ー 5. 教育史におけるモラヴィア派の意義ーヘルンフォート居住とその後ー 6. J.ウェスレーとモラヴィア派ー出会いとイギリス帰国後の活動ー 7. フランケとウェスレーにおける聖化の強調、「キリスト者の完全」 8. モラヴィア派との訣別ーツィンツェンドルフとの対話ー 9. J.ウェスレーにおける義認と聖化 10. J.ウェスレーのキリスト教教育論 11. J.ウェスレーとキングスウッド・スクールー当時の宗教教育状況ー 12. J.ウェスレーと日曜学校運動 13. アメリカ・メソジスト監督教会の日曜学校運動ー初期 14. アメリカ・メソジスト監督教会の日曜学校運動ー組織的發展 15. 全体的考察ー総括ー 	
<p><準備学習等の指示></p> <p>毎回の授業の前半に、受講生が順次発表するが、非発表者も次回扱うテキスト箇所を事前に読んでおくこと。</p>	
<p><テキスト></p> <p>青山学院大学キリスト教文化研究センター篇、『ジョン・ウェスレーと教育』、ヨルダン社、1999年。各自購入しておくこと。購入困難な場合は、担当講師が調達する。</p>	
<p><参考書></p> <p>授業時に随時、紹介する。</p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）></p> <p>授業数の2/3以上の出席を前提として、各自の発表と毎回の授業参加度、およびレポート提出を評価する。</p>	

組織神学専攻・実践神学関係	
実践神学演習 a	山口 隆康
前期・2単位	<登録条件>教会・キリスト教学校に赴任する意志の明確な者
<p><授業の到達目標及びテーマ> 実践神学演習は、実践神学の3領域、説教学、礼拝学、牧会学を扱う演習である。</p>	
<p><授業の概要> 今年度の実践神学演習は、「伝道と説教」をテーマとして扱う。まず、「伝道と教会」について、次に「伝道と説教」について取り上げる。伝道地日本における福音伝道のあり方を、これまでの「伝道論」と「説教論」を総点検する方法で演習を進めたい。</p>	
<p><履修条件> Eメールで長文を送信できること（携帯メールも可）</p>	
<p><授業計画></p> <p>第1回：伝道地としての日本と伝道論（1）、焦眉の課題とは何か</p> <p>第2回：伝道地としての日本と伝道論（2）、伝道論と福音を語るコトバ</p> <p>第3回：伝道地としての日本と伝道論（3）伝道と神学的思考</p> <p>第4回：これまでの伝道論の再検討（1）伝道と教会建設</p> <p>第5回：これまでの伝道論の再検討（2）伝道者論</p> <p>第6回：これまでの伝道論の再検討（3）伝道論と伝道組織論</p> <p>第7回：日本基督教団の伝道と伝道論の再検討（1）伝道状況の点検 その1</p> <p>第8回：日本基督教団の伝道と伝道論の再検討（2）伝道状況の点検 その2</p> <p>第9回：日本基督教団の伝道と伝道論の再検討（3）</p> <p>第10回：日本基督教団の伝道と伝道論の再検討（4）</p> <p>第11回： 伝道論と牧会学 その1</p> <p>第12回： 伝道論と牧会学 その2</p> <p>第13回： 伝道史と教会史</p> <p>第14回：伝道を進める説教と説教学</p> <p>第15回：伝道を進める説教の神学</p>	
<p><準備学習等の指示> 『伝道の幻に生きる教会建設』山口隆康著、美竹文庫第1巻（日本基督教団美竹教会ホームページ参照）</p>	
<p><テキスト> 山口隆康著 『21世紀伝道の幻II』日本基督教団玉川平安教会出版部刊</p>	
<p><参考書> 演習の中で必要に応じて紹介する。</p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）> 原則として演習中の発表による評価。</p>	

組織神学専攻・実践神学関係	
実践神学演習 b	山口 隆康
後期・2単位	<登録条件>教会・キリスト教学校に赴任する意志の明確な者
<p><授業の到達目標及びテーマ> 実践神学演習は、実践神学の3領域、説教学、礼拝学、牧会学を扱う演習である。</p>	
<p><授業の概要> 後期の実践神学演習は、「伝道と説教」について取り上げる。伝道地日本における説教の諸課題を、これまでの「説教と説教論」を総点検する方法で演習を進めたい。</p>	
<p><履修条件> Eメールで長文を送信できること（携帯メールも可）</p>	
<p><授業計画></p> <p>第1回：伝道地としての日本と説教論（1）、焦眉の課題とは何か</p> <p>第2回：伝道地としての日本と説教論（2）、福音を語るコトバをめぐる諸問題</p> <p>第3回：伝道地としての日本と説教論（3）説教と神学的思考</p> <p>第4回：これまでの説教論の再検討（1）説教をめぐる諸問題</p> <p>第5回：これまでの説教論の再検討（2）説教をめぐる諸課題</p> <p>第6回：これまでの説教論の再検討（3）説教と教会建設（教会形成）</p> <p>第7回：これからの説教の課題、（1）受洗者を産み出す説教</p> <p>第8回：これからの説教の課題、（2）聖餐の食卓への招きとしての説教</p> <p>第9回：これからの説教の課題、（3）神の民をあつめる説教</p> <p>第10回：これからの説教の課題、（4）説教と神の国</p> <p>第11回：説教と「説教の神学」（1）説教の課題と教義学</p> <p>第12回：説教と「説教の神学」（2）説教の課題と旧約聖書</p> <p>第13回：説教と「説教の神学」（3）説教の課題と新約聖書</p> <p>第14回：伝道と教会建設を進める説教と説教論</p> <p>第15回：伝道を進めるこれからの説教と説教者</p>	
<p><準備学習等の指示> 『伝道の幻に生きる教会建設』山口隆康著、美竹文庫第1巻（日本基督教団美竹教会ホームページ参照）</p>	
<p><テキスト>山口隆康編著 『21世紀伝道の幻Ⅱ』（日本基督教団玉川平安教会出版部刊）演習の第1回目に希望者を募り手配する予定。</p>	
<p><参考書> 演習の中で必要に応じて紹介する。</p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）> 原則として演習中の発表とレポートによる評価。</p>	

組織神学専攻・実践神学関係	
キリスト教教育特研	朴 憲郁
前期・2単位	<登録条件>
<p><授業の到達目標及びテーマ></p> <p>19世紀の北米最大のキリスト教教育学者であったホーレス・ブッシュネルはカルヴァン主義的会衆派教会の牧師であった。後代にも多大な影響を及ぼした彼の代表的著書、『キリスト教養育』をじっくり学んでいく。</p>	
<p><授業の概要></p> <p>信仰復興運動による回心が強調された19世紀アメリカにおいて、家庭における子供の信仰育成の重要性を説いたブッシュネルのキリスト教教育論とその後の反響を考察して、今日の宗教教育論への妥当性を問う。</p>	
<p><履修条件></p> <p>特になし</p>	
<p><授業計画></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 19世紀北米の宗教事情 2. ブッシュネルの生涯と思想 3. テキスト『キリスト教養育』より キリスト教養育とはなにかー信仰育成の必要ー 4. キリスト教養育とはなにかー神の啓示による論証ー 5. だちょうの養育 6. 家庭の有機的一体性 7. 幼児洗礼とその発展と使徒的権威 8. 子どもたちの教会員資格 9. クリスチャンの家系が多数派となる力 10. 養育の開始の時期と場所、養育の主体（親） 11. 神の恵み的手段である身体的養育 12. 信仰の妨げと家庭統治 13. 遊びと娯楽、祝日と日曜日 14. 子どものキリスト教教育、家庭の祈り 15. ブッシュネル理論の批判的検証と今日的意義 	
<p><準備学習等の指示></p> <p>受講生に一度は発表してもらうが、他の非発表者も毎回、次のテキスト箇所を読んで前理解をもっておくこと。</p>	
<p><テキスト></p> <p>H. ブッシュネル、(森田三千代訳)、『キリスト教養育』、教文館、2009年</p>	
<p><参考書></p> <p>授業時に随時紹介する。</p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）></p> <p>授業数の2/3以上の出席を前提として、発表と授業時の参加度、およびレポート提出をもって評価する。</p>	

組織神学専攻・実践神学関係	
臨床牧会教育 a	W. ジャンセン
前期・2単位	<登録条件>
<p><授業の到達目標及びテーマ> 病院での実習により、牧会的な心得を身につけること。</p>	
<p><授業の概要> 吉祥寺病院（精神科）を実習のフィールドとして、医師、看護師、ソーシャルワーカー等の協力を得、患者との面接を行い、講師のスーパーヴィジョンを受けて、実際的にカウンセリングを学ぶ。</p>	
<p><履修条件> 講義は登録者2人以上から6人未満で成立する。</p>	
<p><授業計画> ＊オリエンテーション ＊院長による精神病理の講義。病院見学。 ＊病棟で患者と面接を行い、ケアを与えることを学ぶ。 ＊面接記録をスーパーヴァイザー（担当教員）に提出し、コメントをうける。 ＊各学生によるケース提出とディスカッションを行う。</p> <p>第1回から第15回まで、様々な牧会ケアテーマで学び、自分の牧会者像を明確にする。</p>	
<p><準備学習等の指示> 遅刻をしないこと。 休まないこと。</p>	
<テキスト>	
<参考書>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）> 実習の参加度によって評価する。 期末テストによって評価する。</p>	

組織神学専攻・実践神学関係	
臨床牧会教育 b	W. ジャンセン
後期・2単位	<登録条件>
<p><授業の到達目標及びテーマ> 病院での実習により、牧会的な心得を身につけること。</p>	
<p><授業の概要> 吉祥寺病院（精神科）を実習のフィールドとして、医師、看護師、ソーシャルワーカー等の協力を得、患者との面接を行い、講師のスーパーヴィジョンを受けて、実際的にカウンセリングを学ぶ。</p>	
<p><履修条件> 臨床牧会教育 a を終えていること。</p>	
<p><授業計画> *各回、各病棟におもむき、患者と出会い、カウンセリングを行う。 *面接記録（逐語記録）をつくり、スーパーヴァイザー（担当教員）に提出し、コメントを得、話し合いをする。 *各自のケース・レポートをし、ケース・スタディをする。</p> <p>第1回から第15回まで、様々な牧会ケアテーマで学び、自分の牧会者像を明確にする。</p>	
<p><準備学習等の指示> 遅刻をしないこと。 休まないこと。</p>	
<テキスト>	
<参考書>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）> 実習の参加度によって評価する。 期末テストによって評価する。</p>	

専攻間共同科目	
日本伝道論演習 a	山口 隆康
前期・2単位	<登録条件>「牧会者」として教会に赴任する意志の明確な者
<p><授業の到達目標及びテーマ> 実践神学の中に位置づけられた「日本伝道論」は、説教学、礼拝学、牧会学を統合する教会実践を課題とし、とくにその教会実践を伝道地日本においてどのように展開するかを取り扱う。</p>	
<p><授業の概要> 日本伝道論 a の演習のテーマを「教会法」を学ぶ。とくに「日本基督教団の教憲・教規」をとりあげる。「教会法とは何か」「教会法と世俗法」という基礎的学習から始め、日本基督教団法制史を概観し、現在の日本基督教団と所属各教会の直面している諸問題を教会法の観点から考察を加えていく。</p>	
<p><履修条件> なし</p>	
<p><授業計画></p> <p>第1回：教会法と世俗法</p> <p>第2回：ローマ・カトリック教会の「カノン法」</p> <p>第3回：福音主義教会における教会法をめぐる諸課題</p> <p>第4回：日本基督教団法制史 その1 日本基督教団の成立と教会規則</p> <p>第5回：日本基督教団法制史 その2 宗教団体法と日本基督教団規則</p> <p>第7回：日本基督教団における「教憲・教規」の制定</p> <p>第8回：「教憲」とは何か。</p> <p>第9回：「日本基督教団教憲」の特徴</p> <p>第10回：「日本基督教団教憲」と「日本基督教団信仰告白」</p> <p>第11回：「日本基督教団教憲」と「会議制」</p> <p>第12回：「日本基督教団教憲」における全体教会と個教会</p> <p>第13回：「日本基督教団教憲」における教職制度</p> <p>第14回：「日本基督教団教憲」と教規</p> <p>第15回：「日本基督教団教憲・教規」と所属個教会規則</p>	
<p><準備学習等の指示> 『日本基督教団教憲・教規および諸規則』を手元におき、すぐに参照できるようにしておくこと。</p>	
<p><テキスト> 演習において配布する。</p>	
<p><参考書> 演習において紹介する。</p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）> 原則としてレポートによる。</p>	

専攻間共同科目	
日本伝道論演習 b	山口 隆康
後期・2単位	<登録条件>「牧会者」として教会に赴任する意志の明確な者
<p><授業の到達目標及びテーマ> 実践神学の中に位置づけられた「日本伝道論」は、説教学、礼拝学、牧会学を統合する教会実践を取り扱う。とくに伝道地日本において教会をどのように建設するかという課題を取り扱う。</p>	
<p><授業の概要> 本年の日本伝道論 b の演習のテーマを「日本基督教団教憲・教規」の解釈とする。「日本基督教団教憲・教規」の解釈の中で、とくに「教職論と招聘制度」「教会法と牧会」に焦点を合わせ演習をすすめる。</p>	
<p><履修条件> なし</p>	
<p><授業計画></p> <p>第1回：「日本基督教団教憲」と教会の「かたち」の問題</p> <p>第2回：「日本基督教団教憲」における会議制と「法の支配」</p> <p>第3回：「日本基督教団教憲」における教職と信徒</p> <p>第4回：「日本基督教団教憲・教規」における招聘制度</p> <p>第5回：「日本基督教団教規」における招聘とその手続き その1 教会法と召命</p> <p>第6回：「日本基督教団教規」における招聘とその手続き その2 教職の招聘と教会会議</p> <p>第7回：「日本基督教団教規」における招聘とその手続き その3 教会総会と教会役員会</p> <p>第8回：教会法と伝道 教職観と招聘制度</p> <p>第9回：教会法と伝道 教憲・教規の解釈の視点から</p> <p>第10回：教会法と伝道 会議制と教会形成</p> <p>第11回：教会法と伝道 教会会議としての個教会の会議</p> <p>第12回：教会法と伝道 牧師の辞任・解任・隠退をめぐる諸問題</p> <p>第13回：教会法と伝道 教会規則と葬儀</p> <p>第14回：教会法と伝道 教会規則と結婚・離婚</p> <p>第15回：教会法と伝道についてのまとめ</p>	
<p><準備学習等の指示> 『日本基督教団教憲・教規および諸規則』を参照できるようにしておくこと。</p>	
<p><テキスト> 演習において必要に応じて配布する。</p>	
<p><参考書> 演習において必要に応じて紹介する。</p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）> 原則としてレポートによる。</p>	

専攻間共同科目	
アジア伝道論演習 a	朴 憲郁
前期・2単位	<登録条件> なるべく通年で履修する。
<p><授業の到達目標及びテーマ></p> <p>キリスト教は学問理論として研究・考察され得るが、何よりも歴史の中に働く神の啓示たるイエス・キリストの福音の力として、実践的行為において存続する。それは、キリスト共同体形成と福音伝道の形をとる。この福音伝道を理論的、歴史的に考察し、それを特にアジア的文脈において行うことを目指す。</p>	
<p><授業の概要></p> <p>伝道学とは何かを教会および伝道前線において考察した後、アジアのキリスト教を諸宗教との関連で、また日本との比較において特徴づけ、その次に東北アジア・キリスト教の意義と課題を明らかにしていきたい。</p>	
<p><履修条件></p> <p>特になし</p>	
<p><授業計画></p> <p>第1回： 伝道論・宣教論が学問として確立された19世紀</p> <p>第2回： 教会の伝道を巡って</p> <p>第3回： 宗教改革の神学と伝道</p> <p>第4回： 伝道における教会の革新</p> <p>第5回： 現代の伝道論・伝道のパラダイム転換—David Bosch 理論の紹介</p> <p>第6回： 現代の伝道論・伝道のパラダイム転換—David Bosch 理論の積極的・批判的検討</p> <p>第7回： 日本のキリスト教とアジアのキリスト教—少数派としてのキリスト教</p> <p>第8回： アジア・キリスト教協議会（CCA）について</p> <p>第9回： アジアのキリスト教の特色</p> <p>第10回： キリスト教とアジアの諸宗教</p> <p>第11回： アジアにおけるキリスト教の意義</p> <p>第12回： アジア・キリスト教会史</p> <p>第13回： アジア・キリスト教伝道の方法と実践</p> <p>第14回： アジア・キリスト教伝道の反省と課題</p> <p>第15回： 今後の展望</p>	
<p><準備学習等の指示></p> <p>講義もするが、受講者はできるだけ一度はテーマに従って発表していただく。次週授業で扱うテキスト箇所は皆が事前に読んで予備知識をもち、議論に参加できるよう心がけること。</p>	
<p><テキスト></p> <p>日本基督教団出版局編、『アジア・キリスト教の歴史』、1991年</p>	
<p><参考書></p> <p>D. ボッシュ著、東京ミッション研究所 訳、『宣教のパラダイム転換』上(1999)、下(2001)、新教出版社</p> <p>隅谷三喜男、『アジアの問いかけと日本』、聖学院大学出版会、1994年</p> <p>渡辺信夫、『アジア伝道史』、いのちのことば社、1996年</p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）></p> <p>授業の中で行う定期的発表、意見・質問等の参加度、および最終授業までに提出されたレポートを総合的に評価することをもって、定期試験とする。</p>	

専攻間共同科目	
アジア伝道論演習 b	朴 憲郁
後期・2単位	<登録条件> なるべく通年で履修する。
<p><授業の到達目標及びテーマ></p> <p>キリスト教は学問理論として研究・考察され得るが、何よりも歴史の中に働く神の啓示たるイエス・キリストの福音の力として、実践的行為において存続する。それは、キリスト共同体形成と福音伝道の形をとる。この福音伝道を理論的、歴史的に考察し、それを特にアジア的文脈において行うことを目指す。</p>	
<p><授業の概要></p> <p>今回は、アジア諸国のキリスト教宗教一般を扱わず、一国を選び、その国の歴史と文化におけるキリスト教受容のプロセスを考察していく。日本と中国の間に位置する韓国のキリスト教を共に学んでいく。</p>	
<p><履修条件></p> <p>特になし。</p>	
<p><授業計画></p> <p>第1回： アジアにおけるキリスト教－文化的、伝道論的視点から</p> <p>第2回： 初期におけるキリスト教との接触</p> <p>第3回： ネストリウス派キリスト教（景教）の足跡</p> <p>第4回： 韓国におけるローマ・カトリックの宣教</p> <p>第5回： プロテスタント宣教と韓国人</p> <p>第6回： プロテスタント宣教の始まり</p> <p>第7回： 近代啓蒙運動とキリスト教伝道</p> <p>第8回： 教会設立と民族運動</p> <p>第9回： 十字架の下なる教会</p> <p>第10回： 分派活動とエキュメニカル運動</p> <p>第11回： 宗教と神社問題</p> <p>第12回： 第二次世界大戦後の推移－教会再建と分裂</p> <p>第13回： 1960代までの宗教状況</p> <p>第14回： 1960年代後半から今日まで</p> <p>第15回： 今後の展望</p>	
<p><準備学習等の指示></p> <p>講義もするが、受講者はできるだけ一度はテーマに従って発表していただく。次週授業で扱うテキスト箇所は皆が事前に読んで予備知識をもち、議論に参加できるよう心がけること。</p>	
<p><テキスト></p> <p>土肥昭夫、他 共著、『アジア・キリスト教史』[1]、教文館</p>	
<p><参考書></p> <p>関庚培(金忠一訳)、『韓国キリスト教会史』、新教出版社、1981年</p> <p>H.G. アンダーウッド (韓哲籟訳、『朝鮮の呼び声』、未来社、1976年</p> <p>柳東植(澤、金 共訳)、『韓国キリスト教 神学思想史』、教文館、1986年</p> <p>澤正彦、『未完 朝鮮キリスト教史』、日本基督教団出版局、1991年、その他</p>	
<p><学生に対する評価(方法・基準)></p> <p>授業の中で行う定期的発表、意見・質問等の参加度、および最終授業までに提出されたレポートを総合的に評価することをもって、定期試験とする。</p>	

実践神学研修課程	
説教学演習 I	朴 憲郁 山口 隆康
前期・2単位	<登録条件>
<p><授業の到達目標及びテーマ></p> <p>「説教学とは何か」から始め、説教学の基本を学び、説教作成の方法を身につけ、説教の自己評価、自己改善ができるようにする。</p>	
<p><授業の概要></p> <p>まず「説教学とは何か」を学び、説教者のための神学の必要を学ぶ。次に説教準備の一つ一つの段階の意味について考察しつつ、第一の黙想から説教行為までの実際に取り組む。</p>	
<p><履修条件></p>	
<p><授業計画></p> <p>第1回 現代説教学の課題 説教とコトバ、説教テキストの朗読</p> <p>第2回 現代説教学の課題 説教と修辞学</p> <p>第3回 現代説教学の課題 説教と解釈学</p> <p>第4回 現代説教学の課題 説教黙想論</p> <p>第5回 第一の黙想と説教テキストの本文批評と私訳</p> <p>第6回 釈義と説教準備をめぐる諸課題</p> <p>第7回 テキストの釈義、「解釈と適用」の問題</p> <p>第8回 説教と説教者論 説教者とはだれか？</p> <p>第9回 説教と会衆（聴き手）をめぐる諸問題</p> <p>第10回 説教作成と説教黙想 説教黙想の実例を読む その1</p> <p>第11回 説教作成と説教黙想 説教黙想の実例を読む その2</p> <p>第12回 説教黙想を作成する</p> <p>第13回 説教の作成、とくにその構造と構成</p> <p>第14回 説教の始め方、進め方、終わり方</p> <p>第15回 説教の演述</p>	
<p><準備学習等の指示></p> <p>聖書全巻を通読しておくこと。</p>	
<p><テキスト></p>	
<p><参考書></p> <p>テーマごとにクラスで指示する。</p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）></p> <p>説教作成の諸段階で、その都度レポートを提出する。遅れて提出することは認められないので、その都度必ず提出すること。</p>	

実践神学研修課程	
説教学演習Ⅱ	朴 憲郁 小泉 健
後期・2単位	<登録条件> 説教学演習Ⅰを履修済み(予定)
<授業の到達目標及びテーマ> 説教学の基本を学び、実際になされた説教を分析する方法を身につける。	
<授業の概要> 説教分析の方法論を明確にし、実際になされた説教を取り上げて、説教分析に実際に取り組む。	
<履修条件>	
<p><授業計画></p> <p>第1回 会衆席の説教学 第2回 説教分析論：なぜ説教を分析するのか 第3回 説教分析の方法：「分析素」の定め方 第4回 分析（1）第一印象の収集 第5回 印象批評と第一印象論 第6回 分析（2）説教の構造と構成 第7回 説教の構造と構成をめぐる問題 第8回 分析（3）説教における説教者 第9回 説教における説教者をめぐる問題 第10回 分析（4）説教における聞き手 第11回 説教における聞き手をめぐる問題 第12回 分析（5）説教と聖書テキスト 第13回 説教と聖書テキストをめぐる問題 第14回 分析（6）説教における神の名 第15回 説教における神の名</p>	
<準備学習等の指示> 聖書全巻の通読を続けること。配布される論文、説教を十分読んで準備すること。	
<テキスト> 論文、説教などを教室で配布する。	
<参考書> 加藤常昭『説教批判・説教分析』教文館、2008年。	
<学生に対する評価（方法・基準）> 発表と授業への参加度、レポートによって評価する。	

実践神学研修課程	
説教学演習Ⅲ	芳賀 力
後期・2単位	<登録条件>修士論文を提出し、卒業に備えている者
<p><授業の到達目標及びテーマ> テキストの釈義から黙想を経て説教を準備し、実際に説教するに至るまでの過程を体験することにより、説教者として立つための基本的な訓練を行う。</p>	
<p><授業の概要> 担当者を決め、指定された聖書テキストに従って説教を準備し、説教してもらう。また説教批評を共有することで、説教者としての自己吟味の能力をも養う。</p>	
<p><履修条件> 修士論文を提出し、受理されて、博士課程前期課程修了見込みである者。</p>	
<p><授業計画></p> <p>第1回 説教とは何かを考えながら、テキストの釈義、黙想、構成について考察する。</p> <p>第2回 マタイによる福音書 20：1－16</p> <p>第3回 マルコによる福音書 6：30－44</p> <p>第4回 ルカによる福音書 16：1－13</p> <p>第5回 ヨハネによる福音書 3：1－10</p> <p>第6回 ローマの信徒への手紙 5：1－11</p> <p>第7回 コリントの信徒への手紙二 4：7－15</p> <p>第8回 エフェソの信徒への手紙 1：3－10</p> <p>第9回 ヨハネの手紙一 3：1－3</p> <p>第10回 創世記 28：10－19</p> <p>第11回 申命記 8：1－10</p> <p>第12回 詩編 23：1－6</p> <p>第13回 イザヤ書 6：1－8</p> <p>第14回 ホセア書 6：1－6</p> <p>第15回 総括</p>	
<p><準備学習等の指示> 担当箇所を準備を入念にすること。また他の人の説教を聞いて、適切な批評をし、共に学び合うこと。</p>	
<p><テキスト> 新共同訳聖書</p>	
<p><参考書> 該当箇所の注解書、黙想集、説教集</p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）> 演習に積極的に参加し発言する姿勢が問われる。その上で説教実習の内容を評価する。</p>	

実践神学研修課程	
礼拝学演習	小泉 健
後期・2単位	<登録条件> 修士論文を提出し、2015年4月に教会、学校に赴任する意志が明確であること
<授業の到達目標及びテーマ> 礼拝学の基本、特に教会の礼拝を司る者が身につけるべき礼拝学的思考の特質を学ぶ。	
<授業の概要> 主日礼拝を初めとして、その他の諸礼拝、結婚式、葬儀などの祈りの形式について、毎回テーマを定め、参加者の発表を通して学ぶ。	
<履修条件>	
<p><授業計画></p> <p>第1回 礼拝学的思考の特質について</p> <p>第2回 キリスト教礼拝史（1）初代教会、古代教会の祈り</p> <p>第3回 キリスト教礼拝史（2）中世の教会とローマ典礼</p> <p>第4回 キリスト教礼拝史（3）宗教改革における礼拝改革</p> <p>第5回 キリスト教礼拝史（4）近代・現代の礼拝</p> <p>第6回 ローマ・カトリック教会における典礼の刷新</p> <p>第7回 東方教会の奉神礼</p> <p>第8回 日本基督教団の主日礼拝式と礼拝祈祷</p> <p>第9回 洗礼式</p> <p>第10回 聖餐礼典</p> <p>第11回 結婚式</p> <p>第12回 葬儀</p> <p>第13回 礼拝堂</p> <p>第14回 教会暦と聖書日課</p> <p>第15回 教会学校の礼拝</p>	
<準備学習等の指示> 発表者だけでなく、参加者全員が自分なりの課題や意見を整理して演習に臨むこと。	
<テキスト>	
<p><参考書></p> <p>W. ナーゲル『キリスト教礼拝史』教文館、1998年（オンデマンド）</p> <p>その他については第1回の授業時にテーマごとに紹介する。</p>	
<学生に対する評価（方法・基準）> 発表と授業への参加度によって評価する。	

実践神学研修課程	
牧会学演習	小泉 健
後期・2単位	<登録条件> 修士論文を提出し、2015年4月に教会、学校に赴任する意志が明確であること
<授業の到達目標及びテーマ> 実践神学を牧師学としてとらえ、牧師が身につけるべき基本を学ぶ。	
<授業の概要> 牧師が担うべき教務、牧師が実践活動を行う場面を一つずつ取り上げ、参加者の発表を通して必要な知識と方法を身につける。	
<履修条件>	
<p><授業計画></p> <p>第1回 牧師学としての実践神学 第2回 召命と准允、按手 第3回 「牧師職」、赴任と離任 第4回 招聘制度と牧会 第5回 結婚と離婚 第6回 キリスト者の家庭と信仰の継承 第7回 病者の牧会 第8回 葬儀とその周辺 第9回 告解・面談 第10回 洗礼への導きと受洗準備 第11回 聖餐と牧会 第12回 教会戒規 第13回 教会会議（教会総会、役員会）と議長職 第14回 牧会と教会法 第15回 全体教会と個教会、教会の制度</p>	
<準備学習等の指示> 発表者だけでなく、参加者全員が自分なりの課題や意見を整理して演習に臨むこと。	
<テキスト>	
<参考書> E. トゥルナイゼン『牧会学Ⅰ』『牧会学Ⅱ』日本基督教団出版局、1961、1970年（オンデマンド） その他については第1回の授業時にテーマごとに紹介する。	
<学生に対する評価（方法・基準）> 発表と授業への参加度によって評価する。	

実践神学研修課程	
総合特別講義	朴 憲郁
後期・4単位	<登録条件> 修士論文を提出し、2015年4月に教会・学校に赴任する意志の明確な者
<授業の到達目標及びテーマ> 福音主義教会が現在直面している問題、課題に適切に対応していくために必要な学びである。	
<授業の概要> その分野の専門家が、テーマごとの講義を行うオムニバス形式の総合講義である。	
<履修条件> 原則として全回出席できる者	
<授業計画> 第1回：山口隆康講師「日本基督教団史Ⅰ」日本基督教団の成立前史 第2回：山口隆康講師「日本基督教団史Ⅰ」日本基督教団の成立 第3回：山口隆康講師「日本基督教団史Ⅰ」日本基督教団の成立と会派問題 第4回：山口隆康講師「日本基督教団史Ⅰ」教憲・教規、信仰告白の制定とその後の歩み 第5回：長山信夫講師「日本基督教団史Ⅱ」教団史と紛争史の視点 第6回：長山信夫講師「日本基督教団史Ⅱ」「教団紛争」とは何であったか？ 第7回：長山信夫講師「日本基督教団史Ⅱ」紛争史の問題点と問題項目 第8回：長山信夫講師「日本基督教団史Ⅱ」紛争史の文脈における現在の日本基督教団 第9回：大住雄一教授「日本基督教団論」日本基督教団教憲 第10回：大住雄一教授「日本基督教団論」日本基督教団教規 第11回：大住雄一教授「日本基督教団論」所属教会の教会規則（準則） 第12回：大住雄一教授「日本基督教団論」宗教法人法と宗教法人規則 第13回：栗林輝夫講師「部落解放とキリスト教Ⅰ」 第14回：栗林輝夫講師「部落解放とキリスト教Ⅰ」 第15回：小島誠志講師「地方伝道」 第16回：小島誠志講師「地方伝道」 第17回：岩田昌路講師「青年伝道」 第18回：岩田昌路講師「青年伝道」 第19回：本間義信講師「刑務所伝道」 第20回：本間義信講師「刑務所伝道」 第21回：春原禎光講師「ITと伝道」 第22回：春原禎光講師「ITと伝道」 第23回：山崎ハコネ講師「高齢者ケアと牧会」 第24回：山崎ハコネ講師「高齢者ケアと牧会」 第25回：篠浦千史講師「障がい者と教会」 第26回：篠浦千史講師「障がい者と教会」 第27回：朴米雄講師「在日コリアン問題」 第28回：朴米雄講師「在日コリアン問題」 第29回：愛澤豊重講師「キリスト教系諸宗団の問題」 第30回：愛澤豊重講師「キリスト教系諸宗団の問題」 第31回：石橋秀雄講師「教会付属幼稚園・保育園（所）の諸問題」 第32回：石橋秀雄講師「教会付属幼稚園・保育園（所）の諸問題」 第33回：棚村重行教授「エキュメニズムⅠ（世界のエキュメニズム）」 第34回：棚村重行教授「エキュメニズムⅠ（世界のエキュメニズム）」 第35回：朴憲郁教授「エキュメニズムⅡ（東アジアのエキュメニズム）」 第36回：朴憲郁教授「エキュメニズムⅡ（東アジアのエキュメニズム）」 第37回：野村忠規講師「牧会者の挫折とその克服」 第38回：野村忠規講師「牧会者の挫折とその克服」 ※講師は予定。当該年度に決定する。	
<準備学習等の指示> 日本基督教団の補教師試験を受験する者は、「補教師試験の過去問題集」に目を通しておくこと。	
<テキスト> 「日本基督教団史」「教務関係書式集」「日本基督教団教憲教規および諸規則」	
<参考書> 担当教授、講師が講義の中で紹介する。	
<学生に対する評価（方法・基準）> レポートによって評価する。	